



## 次 目

- 佛教の根本と其の應用（其十） ..... 本  
開目鈔講話（承前） ..... 小河  
本尊曼陀羅の意義（二） ..... 河  
宗教團體法案議事錄瞥見 ..... 碓守  
宗教生活と教義 ..... 碓守  
鈴木日雄上人 ..... 碓守  
山田理事令夫人を悼む ..... 碓守

### 記 事

- 本部團報 ○同心會報 ○福島支部報  
○團費誌料寄附金及維持費領收

多林合部屋

一日陟滿滿貫

生郎明事教事

## 財人統一團趣旨

統一團へ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就て見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン又著述出版ニ於テハ大藏經要義法華經要義日蓮主義精要聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雑誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團へ過去ニ於テ如斯多大ナル法勸

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セん

ト欲ス其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事第

二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事第三此ニ適當スル學風ヲ振起

スル事第四時代對應ノ教化ヲ研討シ

テ之ヲ實行スル事第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一

ノ風土教化ヲ持守スル事是レナリ

教旨ノ正明研學ノ潤達活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永

久ニ持續セントスル本團事業ノ實質ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ希クハ

同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法

爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

## 本團署則

◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シ

テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ

理想ノ文明ヲ建設スペク皆頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』

ヲ發行ス

◎維持員 本團ノ事業ヲ實費シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳四五拾圓ヲ輸出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

## 佛教の根本と其の應用

(其十)

### 本多日生

#### 唯我一人の權威

法華經に於てはその思想を最も明瞭にしたのであつて、それが譬喻品の「唯我一人能爲救護」といふ經文に現れて、唯我一人能く救ひ護りを爲すと仰せられた、一人で一切のものを救ふといふのである。それは前の經文に詳しい意味が説いてある。我はこの手に力がある、幾人ぶら下つても重いとは言はぬ、十方法界の一切衆生我が一人の手を以て救ひ得るといふことを自らお説きになつて居るのであります。そこに佛様の尊い所があるのである。『さう津山ぶら下つて呉れては重たいといふやうなことは、人を救ふことは出來るものでないから、唯我一人能爲救護と仰せられた。この「唯我一人能く救護を爲す」といふ思想が、阿含の始めから涅槃の終りに至るまで、佛教の根本觀念として貫いて居るところの思想であります。唯だ法華經は最も明瞭に徹底的にそれを示しただけのものであつて、この思想は佛

教の佛様に關する根本思想であります。故に前に擧げた「若し一人出世すれば多人を饒益し、若し一人出世すれば智慧の光明あり」といふ一人出世の經文はそれである。この「一人出世」といふ言葉が、即ち法華經の「唯我一人能爲救護」といふことである。「唯我一人能く救護を爲す」といふのも、「一人あつて世に出現すれば多人を饒益す」といふのも同じことである。たゞ意味が少しくバツとして考へられるのに對して、周囲から幾ら反対しても反対出來ないやうに明確に説明するといふことが法華經の違ふ點である。一切經を貫いて居る思想であつて、法華經だけが特に變つたことを言つて居る譯ではない、大事な一切經を貫いて居る根本觀念を結束して、それに鞏固な根據を示したるものが法華經だといふことが言へる譯である。であるから佛教といふものは大體どんなものだ、何處に力を入れたものかと言つて、一切經を抜ける暇が無かつたならば、法華經をその盡受容れて、これが佛教全體の根本教義ぢやナと斯う考へれば一番早いのである。けれども法華經々々々とばかり言つて他のお經を忘れて行くやうに思ふならば、翻つて阿含の初めから繙いて見れば、如何に法華經といふものが一切經の精神を結束して居る尊さものかといふことが能く了解されるのである。

それを考へないで、唯だ一切經といふものを平等に同じやうにダラ／＼と考へるといふと、又その中に矛盾が起つて、所謂統一的の佛教觀といふものを立てることが出來ない。小さなお經に依つて分裂をするのも間違ひであるが、一切經をたゞ漠然とどれもこれも同じぢやといふやうなことを言つて居るの

も經りの附かない間違ひである。何處までも法華經を中心にして一切經を開頭統一して、阿含の始めより法華・涅槃の終りまで貫く思想といふものを押へる、これが本當の佛教の觀方で、あとは皆な間違ひである。

日本人がそこまで至らないのは、要するに日本民族の知識の程度が低いといふことになる。さう考へるのが佛教の根柢思想である。又そこまで日本人が進んで行くと、日本の佛教も進歩し、佛教が盛になれば日本も榮えて行くのである。その途中にまご／＼して居る間はお互に話がわからぬといふものぢや、その位の事はお互にわかるやうにならなければいかぬと思ふ。それがわからぬと他の事がやはりわからない、筋は一つである。それを日本人に教へて行くことに依つて、やはり一切の秩序が立ち、統一が立ち、中心が立ちして一切の思想觀念といふものは明になつて行くのである。

そこにモウ一つ佛様に就て考へなければならぬことは、今の信心といふ側から考へて行く時に、この一人の方が能く救ひ護ると仰しやつて下さつた、その救ひ護るといふことを徹底的に考へて置けば宜いのである。どういふことが佛教で言ふところの救ひ護りであるかといふと、第一は現在生活の上に於て吾々のこの心を救うて下されることである。心に於ける迷ひ、それが因になつていろ／＼の苦しみがあり、又誤りを取るこの迷ひ、苦しみ、罪、さういふやうな人間の悲しい事をば救ひ護つて下されるのが佛様の有り難い所なのである。たゞ救うて下さる、護つて下さるというても、何か特別に、悪い事を

して巡回に追掛けられた時に捕まらなかつたとか、強盜に追掛けられた時に刀が折れて斬れなかつたとか、さういふ結果の所だけ考へるからそれが迷信になるのである。左様な考へ方をするからいかぬ。もとより人間の心の中に迷ひがあつて、それが爲に苦しみを産み出し、それが爲に罪を作る、又罪からして苦しみを呼んで来るといふやうな關係で、即ち煩惱・業・苦の三道と申して、煩惱といふものと業といふものと苦といふものゝ三つが巴と入り亂れて、吾々人間をして煩悶苦痛の中に沈淪せしむるものである。その根本の根こそぎから佛様といふものは救うて下されるのである。たゞ泥棒が追掛けられて來た時に『ちょっと待て』と言つて、巡回の代り見たやうに刀を挽取つて下さるとか、病氣になつて死にかかりた時分に助けて下さるとか、さういふ末の事から考へるやうな間に合せの宗教ではない。本當に如何なる人間をも心の底からお救ひなされるところの眞の救濟といふものが、それが佛教の救濟であると能くわかる。一番慨はしいのは自分の心の煩惱である。その迷ひの爲にいろいろの問えが起り、罪が起るのであるから、その心の迷ひを暗闇に譬へたならば、そこに光を與へてその暗い心を明るくして下さい。暗い所であれば物に蹴躡いたり、頭をぶつけたり、轉んだりするけれども、そこに電燈が點けば物に蹴躡かずに行けるやうなものである。心が暗黒であるが故に、泥溝の中に陥つたり、電信柱に頭をぶつけたりすることが出来る、その心の暗黒をあ照し下さるといふことが、救ひ護るといふことの意味である。

なければならぬ。その方が大きな働きがあるのである。一遍ぐらゐ石に蹴頭かずに通れたとしても、心が眞暗がりであつたならば、何時かは蹴躡いて轉ばなければならぬ。一つ暗い所を明るくして置いて貰へば、何時も蹴躡かずに済むのである。その心を根本から明るくしてしまふ。又これを苦しみに悩んで居る方から言へば、その苦しみの根本を除いて下される、即ち毒箭を抜くと申して、毒箭の鏃が折れ込んで、それが因で非常に苦しんで居るのを抜いて下されるやうな譯なのである。たゞ表面からそれを救ふといふことではない。人間の迷ひであるところの物質の慾望が起り、いろいろの悶えといふものが起る。その物質慾の根本からこれを緩和して、その悶え苦しみといふものを救つて下されるのである。男女なら男女の慾望に迷つて心が非常に悶える、その慾望の根本を緩めて、そこに迷ひといふものを去つて下されるから、その苦しみといふものが薄らいで来る。財慾に對しても、その他の生活上の苦悶といふものを、精神力を發揮してその苦しみに戦ひ、その苦しみを撃退するやうにして下されるいふことが佛教の救護である。如何なる事柄でも一切の人生を侵す總ての苦しみを救ひ護つて下されるのである。

### 教 濟 の 本 源

罪といふこともやはりその通りであつて、或は親に不孝をする罪とか、或は嘘を吐く罪とかいふやうな一つの罪ではない。人間が一切の罪惡性といふものから遠離して、さうしてさういふ事が少くな

るやうに導いて下さり、護つて下される力がある。それは佛を渴仰し佛の御教に遵ひ、さうしてその宗教的の行動を執つて居る間に訓練されて、次第に迷ひが薄くなり、苦しみが薄くなり、罪が薄くなつてこの人生に眞の幸福なる生活を遂げるといふことが佛様の教であると、斯う言はなければならぬと思ふ。愈々押詰つて来てから始めて鍊り付く、例へば途中までは非常な考違ひをして居つて刹羽詰つてから、例へば追剥に追掛けられて交番に逃げ込んで来て、「どうぞお助け下さい」といふやうな類の者もあらうけれども、それは特別な場合で、そんな事のみを宗教が教ふものと考へて居つたならば、非常な間違ひである。さういふ場合も勿論お救ひなさらぬことはない。一切經の中にはさういふ場合に、狂人になつてから救つて貢つた者もあり、劍を抜いて人を追掛け居る者が救はれたといふ例もあるけれども、さういふ所に行かぬ中に、根本からお救ひ下される所に佛の教の尊さがより多く輝いて居ることを知らなければならぬと思ふのであります。であるから諸君の家庭に於ても、子供の時分からこの教を與へて佛教を信心さして置くことに依つて、心の光ある生活を遂げ、悶え少き生活を遂げ、罪少き生活を遂て、人生の幸福を夜も晝も味はつて、一生涯その幸福を享けて行くのが本當の救護を受けて居るといふことになるのである。であるから「モウ俺は壯健になつたから信心はしない」とかいふやうに、所謂百日法華などと言つて、何か願を立てゝ、その願が達つたら信心を續けるけれども、俺の言ふことを聽いて呉れぬやうならモウ廢めぢやといふやうな者がある。それは皆な宗教に眞に目醒めない迷へる者の話では思ふ。

その事はお釋迦様はその通りに爲されて居るので、例へば増一阿含の中にも出て居りますが、一人の病人があつた。それは波斯匿王といふ王様であります。この王様がご病氣になつた時に、お釋迦様が見舞に行かれた。王様が言はれるには、どうも私は病氣が苦しくてなりませぬと言つて病苦を想へられた。その時にお釋迦様が何と言はれたかといふと、それはモウ人間として病氣といふものは苦しいものだ、どの病氣が良い病氣だと、好きな病氣だとかいふものがあるものではない。病氣といふものは皆な嫌やなものだ。それだから俺は人間の四苦八苦の中に生老病死と言つて、死の次に苦しいものは病苦であるといふことを常々説いて居るのである。今更のことではない、お前にも豫ねぐ、言つた事である。併し病氣になつて居る體が苦しい上に、心まで無駄な事を考へて聞えるやうであれば、二重の苦しみになるから、切めては心の問えの無いやうに、心に信仰法悅を有つて當れば病苦も薄らぐであらうと

いふことを言はれた。これがお釋迦様の病氣に對する正しい教であらうと思ふ。病氣だけでも苦しいのに、その上にいろ／＼心に餘計な事を考へて問えるから心身共に苦しいことになる、どんな病氣でも病氣に罹つたならば、自分の罹つて居る病氣が一番辛いと思ふのであるが、併しそこに心の問えを有たぬやうにせよと言はれるのである。お釋迦様は病氣の事は非常に氣に懸けて居られるから、佛教徒には病人に對する看病の事を懇切に科教へになつて居るが、家庭に於ても看病の徳といふことを獎勵せられて、殊に婦人は嫁入をする時分に、他の婦人としてのいろ／＼の修養の如くに、看病の心得といふものを學んで、而して後に嫁に行かなければならぬといふことを仰せられた。又社會事業の中に於ても、看病の徳といふものは非常に強く獎勵されたからして、日本でも聖武天皇のお妃が皇后の身でありながら病人の看病をなさつたといふ位で、病氣に關しては左様に看病の事を御心配になり、又醫藥といふものを非常に獎勵せられた。佛様は醫藥の事にはなか／＼詳しくもあり、又老婆といふ非常な名醫を始終一緒にあわせなさつて、釋尊自らの力の及ばぬ事は皆なこの老婆に命じて『この病人を愈せ』と仰せられる。僧院の生活には必ず醫者といふものは一緒に居つたものである。故に日本に佛教が渡つた最初は、天王寺にいきなり施薬院といふものが出来、療病院といふものが出来て、ちょうど今日の病院といふか無料診療所見たやうなものをお聞きになつて居るのである。

左様な譯で醫藥に關しても看病に關してもお釋迦様は盛に仰しやるけれども、併し今之佛教徒のやつき方では決してなかつたのである。

であるからお釋迦様の救護といふことは、今日の言葉にして言へば頗る合理的な救護である、その大部分は吾々人間は精神的に苦しみを感じ、精神的に罪を作り、精神的に悶えて居るのであつて、その精神の持ち方に依つて殆ど人生のあらゆる事といふものは變つて行くのであるから、心は大地の如く、一切の草木地より生ぜざるはなし、非常な臭い毒草が生えるのも、やはり同じ土地から生えるのであり、又その同じ土地から非常な美しい香の良い薬草も生えるのである、その如くに一つの心であるけれども、その中から樂しみも生れて來れば、苦しみも生れて來る、罪も徳も一切心から出て來るのである。その心の修養訓練の爲に宗教といふものは一番大事である、それを教へ導き救ひ護り、如何なる場合に

も吾々人間の味方となつて護つを下さるのが釋迦様である。

そこでその救ひ導きといふことは始終仰しやつて居るのであるが、我は一切衆生を導くものである、我は一切衆生を護るものであると言はれる、その導きといふことは、どういふ風な導き方かと言へば、前に申すやうに物の筋のよくわかる、心に光を與へ、心の中に證明を點するのである、これを慧證明と申して居りますが、佛教といふものは非常にこの證明を大切にするのであつて、佛様は少しも暗いといふ所は無いけれども、佛は光を愛せられて居る、その佛の光が我が心を照すといふので、佛教の儀式に於ては光は幾らでも澤山點けるやうになつて居る、常夜燈といふ位に夜通しでもこれを點けて置く、それは自分之心の暗がりを照して貰ふのである。であるから佛を慧證明と申すので、これはやはり佛様の事である。佛を證明と申して居るのである。その證明はたゞ蠟燭に火を點けて居る譯である、この光が吾々の心の闇を照されるのである。自分の心の闇を照して行くことを思はないで眞暗な儘で益々それを暗くして行くやうなことをやつては、幾ら永く信心をして居つても、何時までも救はれるものではない。人間の心は先づ譯のわからぬ妄聞見たやうな心である。佛の心は涅槃として輝いて居る智慧の證明である、その光を受けるのであるといふことを、佛に合掌する最初に考へなければならない、であるから信心は慧心だといふことを切離してはいかぬので、信心をする位の者は大抵の事には筋が立つて居らなければならぬ、暗黒の部屋としてはいかぬので、信心をする位の者は大抵の事には筋が立つて居らなければならぬ、暗黒の部屋とは

**達**ふ、電燈の涅槃と光つて居る部屋が佛教信者の住むべき部屋である、我等は眞暗がりの部屋に居るから、大きな顔をして居るけれども、大事な所はまだ附くだらう。火鉢に衝かつては轉がるし、柱に頭を衝けては癌を掠へるだらう、その時分にこつちはちやんと光明が點いて居るから、無事に避けて通ることが出来るぞといふ所が、佛教信者の誇りでなければならぬ、そこに佛の教へ導きがあり、そこに佛の教濟がある。

### 慧光照無量

それ故に佛は又この照された心から善い事をするやうに精神を導いて下される、即ち佛に依つて吾々は善根を積む人になつて行くのであります、その場合にお釋迦様は斯う言はれて居る、自分は智慧の結晶であり、慧證明であるが如くに、善の結晶であつて、我を戴く限りに於ては、その人は必ず善根の戰ひに進み行く所の人である。即ち自分を法將と申して居られるのであります、これは戰をする方から言ふのであって、我は即ち法將なり、汝等は法の戰に從ふところの正義の戦士である。だから我を法將と仰いで世の中に奮闘せよ、この大將は誰にも敗けない一番偉い大將である、斯ういふので、釋迦様は如何なる敵が來ても、この人世に於ける敵などは無論誰も我に敵する者は無い、眼に見えざる惡魔も我は降伏させて、惡魔を捨て伏せて而して後に成道した位であるから、今頃眼に見えざる所の無數の惡魔があつても、我の向ふ所は彼等は遁竄して側に寄ることも出来ないといふことを盛に言つて居る。

惡魔も皆なこれを揃ぢ伏せて自分の家來にしてしまはれた「俺の言ふことを聽けば斬罪を許してやる、左もなければお前は頸を刎飛ばしてしまふぞ」……少しも側に寄れない。不動様を連れて来て劍を借りなくとも、誰を味方に連れて來なくとも、優しい釋迦如來の破顔微笑の間に如何なる惡魔も敵しないといふ所に、佛様の偉い所がある。佛教徒の誇りはそこにある。お釋迦様は優しい方であるから、惡魔が攻めて來た時分には、「それ不動様を呼んで來い、鬼子母神を呼んで來い、劍を持つて來て呉れなければ俺は困る」……といふやうなものではない。釋迦如來はいろいろの場合に臨んで、左様な暴力の保護を連れてとなければそこに臨んで行くことをなさらなかつたといふやうな事は決して一遍も無い。愈々危険の迫まる時には單身にきまつて居る。今日はお前達は來てはいかぬ。彼等凶暴なる者が刀を抜いて向つて來るから、今日は供を連れて行くことは出來ぬ。平生の御馳走の時分ならばお前等も連れて行くけれども、今日は彼等が劍を抜いて向つて來るから、俺は一人で行くと言つて、お供をお許しなさらなかつた事がお經の中にも明かに見て居る。それは、一切經の上から觀察して一つの面白い點であるし、又宗教として大事な所なのである。正義の戰ひにはお釋迦様一人さへあつたら、鬼子母神を頼み、帝釋を頼み、不動を頼むといふやうに、さう大勢助太刀を頼まなくとも、或は釋迦牟尼如來を味方にして居る以上は、この優しいお釋迦様一人で如何なる惡魔も、如何なる強敵も皆な粉碎することが出来る。であるから降魔成道の釋迦と申して居るので、これに反対した惡魔は、第六天の魔王といふ惡魔の一一番の頭

である者が、釋迦如來の前に降伏してしまつて居るのである。であるからその以下に屬する魔民魔族といふやうなものは、若し反対しようとすれば、魔王を呼び付けて「貴様どうも俺に降伏すると言ひながら、貴様の子分が斯様な反抗をする事を何故見捨てゝ置くか宜しうございます、早速首を縊めてしまひませう」と言つて、向ふの親分がいきなりお釋迦様の手下になつて居る。であるから如何なる魔民も釋尊の前にはどうすることも出來ない。鬼子母神でも、皆なその通り、十羅刹女いろ／＼の子分もあつたけれども、皆な釋尊の手下になつてしまつた。阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人といふのはこれは何れも惡魔である。八部衆と稱して、恐しい婆羅門であ化け見たやうなものであるが、それが皆なお釋迦様の教に感化せられて法華經に於ては弟子になつて居るのである。阿脩羅といふのは喧嘩をするなどを商賣にして居るものであるが、その阿脩羅王と雖も釋尊の法座には平身低頭して居るのである。それを何故佛教徒がその根本思想といふものを認めないのであるか「いや鬼子母神様を頼みます」とか「いやお不動様を頼みます」とか言つて、この偉大なるお釋迦様の力を信じないで左様なものを擣ぎ出して來るといふことは非常な間違ひであるといふことを、佛教を研究する上には最も深刻に考へて置かなければならぬのである。

# 開目鈔講話

(承前)

## 小林一郎

# 如來祕密神通之力

ところが善無畏や不空は、この二つの曼茶羅ではまだ統一がつかないと見えて、この二つの曼茶羅を掛けて、その真中に法華經を置いて、その法華經の中に現れた壽量品の中にあるやうな「如來祕密神通之力」といふ、その如來といふのが根本の力である。この根本の力が現れたのが胎藏界でもれば金剛界でもあるといふやうな意味でせう、この二つの曼茶羅の真中に法華經といふものを置いた。この法華經を置くといふことは、壽量品に現れた本佛を本尊とするといふ意味であります、これを大王

の如くにして、胎藏界のことを書いた大日經、金剛界のことを書いた金剛經といふものは右と左にして、左右の臣下の如くにして居つた。斯ういふ事實があるのでから、要するに眞言宗といふものは法華經に依つて統一されるものだといふことを、眞言宗を初めて支那に弘めた人々は皆承認して居つた。これを後になつて自分の宗を立てる爲に法華經を疎外して行くといふことは、初めにその宗を弘めた人の精神に悖るものだといふことを茲に説いてあるのであります。

實際私共も大日經とか金剛頂經とかいふものを読んで見ましたが、私が法華經を信じて居るから偏つて居ると思召すかも知れませぬが、法華經以上に出たものは決してない。唯法華經にある「如來祕密神通之力」といふ、その如來を大日といふ言葉で解釋したものでありまして、これは決して外に出たものではないといふことが言へるのであります。これは歴史上に證據もないのですが、恐らく私は斯ういふ風に解釋する、印度は大體に於て北と中央と南と三つに分れて居るのです。中印度の境をするものが例のヒマラヤ山であります。このヒマラヤ山の南の方にお釋迦様は御出現になつた。ネバールといふ日本の輕井澤のやうな所ですが、其處にお釋迦様が御出現になつて、昔のことです。もなければ電車もなかつたら、交通が不便でありまして、お釋迦様は此處から主として中印度に

教をあ説きになつた。靈鷲山とか佛陀伽耶といふ所も中印度であります、南の方の印度にはお釋迦様の御生前には佛教の感化が及ばなかつたのです。それで恐らくはこの南の方に、別に眞言宗で言ふやうな大日如來を本佛と仰ぐ宗教が發達して來たのではないか、斯う思はれるのです。だから眞言宗で言ふ大日經、蘇悉地經、金剛頂經といふものには、釋迦牟尼といふものは一つも出て居りません、大日如來といふ佛様が出て、大日如來が教をあ説きになつたと言はれて居りますから、大日如來を中心とする宗教は、南印度に弘まつた一つの宗教で、それからお釋迦様を中心とする佛教は中印度から北印度まで含んで弘まつたのだ。斯ういふ風に考へられる。この中印度に弘まつた佛教の勢力がだんだん擴がつて行つたから、そこで佛滅後數百年経つた後に、南の方に弘まつた教と合流して一つの大きなものになつた、斯う解釋すれば能く解ると思ふの

であります。だから眞言の方の教は、初は佛教と別に發達したのだが、佛教の勢力が大きくなるに及んで、これと結合して一つになつたものだと私は解釋します。私はばかりでなく、同じ意見の人もありますが、さう解釋すると能く解るのです。こつちはお釋迦様を中心として居る。こつちは大日如來を中心として居る。これが一緒になつた。そこで大日如來といふものと、お釋迦様の仰しやつた壽量品の祕密神通之力、これをどう解釋するか。こつちで言ふ大日如來といふものと、こつちで言ふ本佛といふものが違ふか同じかといふ議論が起つて来る。それで今善無畏とかいふ人が支那に眞言を弘めた時に、天台の本を読んで見て、自分で大日如來と言つたのも、向ふの方で本佛と言つたのも、同じものを違つた言葉で言つたに過ぎないといふことに気が付いて、そこで『理同』といふことを言ひ出した。結局同じなのだ、一つのものを見て居たのだ。人間

質を盡して居る。斯う思はれるのです。それで私は眞言宗を信じないで法華經を信じて居る譯です。何も眞言宗を贋物とは思ひませぬ。一つの面を見たのですが、見方がまだ浅い。だから法華經を中心にして自分の信仰を定める方が宜いと自分で思つて居るのですけれども、眞言宗の方で大日如來と言つたのも、法華經の方に現れた本佛を向ふから見たので、或る程度までは能くこれを見たのだといふことは認めなければならぬと思ふのです。全く嘘を吐いて居るのではない。

併ながら人間の信仰を定める上に於ては、一番善いものを信じなければならない。人間の命が何處までも續くものではないのですから、この限りある命の中に於て信仰を求めなければならぬ以上は、一番善いものを求めなければならぬのでありますから、そこで日蓮上人も、眞言宗の言ふことがまるで嘘とはお思ひにならなかつたらうが、これはまだ至らない

ものだ、法華經の壽量品に説かれたものが一番上だから、一番上のものを差措いて、下のものを一番善いと思つて居つたのでは済まないといふので、これに對する折伏を加へられたのであるといふやうに考へると、その間の問題がスラ〜と解かるやうに思ふのあります。私共は今法華經を中心として信仰を勵んで居りますけれども、他のものを贋とは思はない。贋物ではないが、まだ至らざるものだ、足らないものだ、足らないものだから、その足らないものを信ずるよりは、モット完全なものを信じて行つた方が宜いではないかといふ上に於て、所謂折伏をする。他の教はまだ足らないから、それを捨てるといふことを言ふ、これは要するに佛の慈悲心を受繼ぐ態度としてさうあるべきものだらうと思はるのであります。

ところが宗旨と宗旨とが對立して居ると、兎角に自分の方だけ偉くしたがるものだから、他是贋物だといふことを言ふのであります。これはいけない。

が眞面目に見れば、天地萬物の根本となるものは一つきりないといふことが解るのだから、お釋迦様の仰しやつた本佛といふ如來も、自分達の言つた大日といふものも、同じものを見て居たのだなといふことに気が付いた。そこで理同と言つた。併ながら自分達の宗を立てる爲には理同だけでは濟まないから、理窟は同じだけれども、信仰をする儀式だとか、どういふ風にして佛を拜んだら宜いとか、どういふ風にして修行したら宜いといつた方では自分が上だからといふので『理同事勝』事勝といふのは實行の方は自分が上だといふ議論が立つて來た譯ですが、大日如來といふものは一方から本佛を見たのが、大日如來といふものは何宗でもないけれども、その見方が浅い。私は何宗でもないから、公平に見ると、大日經、薦悉地經に現れた大日如來よりは、法華經その他の大乘の經典に現れた佛の方がモット深い所まで行つて居る。モット佛の性

人間が何百年も何千年も贋物に欺されて居たのだと  
いふやうに思つてはならないでせう。そんなことを  
思ふのは、人間が自分で自分を侮辱することです。  
贋物を世に弘めても、三年や五年は勢力を得ること  
うが、百年も千年も勢力を得るといふことはあり得  
ない。そんなことを考へるのは、人間が皆馬鹿だと  
自分で自分を侮辱することになる。だから耶蘇教で  
も、婆羅門教でも、一部分本當の事を捉へて居るか  
でせう。これを贋物扱ひするには及びません。けれ  
ども今言ふやうに、出来るならば一番善い教を信じ  
て行きたいものです。人間の一生は限りがあるので  
すから、さういふ意味に於て、法華經を中心とした  
佛教が一番善いものだと思ふから、これを信じて、  
他の宗教はまだ一梯子段の途中のやうなものだから、  
それを捨ててこの上まで昇つて來い。斯ういふ  
ことを勧めるのは、これが本當の慈悲だらう、これ

が本當の親切だらう、斯う思ふ。日蓮上人の折伏も  
それと同じ御精神に相違ない。斯う思つて行けば、  
諸宗と法華經を中心とした信仰との關係は、自ら明  
になつて行くだらうと思ひます。

これは自分の胸に至らない考を有體に申上げた  
のであります。私は自分の信仰を決定するに付  
ては、大體さういふやうな筋道を考へまして、自分  
は法華經を中心として信仰を勵みたい、これが一番  
優れたものである。他のものはどうして行くかと言  
へば、今のやうな關係で解釋して行つて、それぐ  
の價值を認める。けれどもモソト善くなるやうにと  
いふ考から、法華の信仰に導いて行きたい、誘つ  
て行きたい、斯ういふ風に思つて居ります。併して  
これは私一人の考へ方でありますから、或は間違つ  
て居るかも知れません。若し間違つて居たらお教を  
受けたいと思ひます。

さういふやうなことで真言宗と法華經との間の關  
係を解釋しますと、大體解釋がつくのです。今の胎  
藏界を説明した大日經、金剛界を説明した金剛頂  
經といふものは、これは法華經に及ばないものだから、  
法華經を中心として、これを左右の臣下の如く  
に考へて居つた。これが正しい解釋の仕方である。  
それから日本で真言宗を弘めた弘法大師なども、  
『教相の時は』教を唯比較してどちらが上か、どちら  
が下かといふことを議論する場合には、華嚴宗の方に心を寄せて、華嚴宗の方が上だと思つて、法華  
經は第八番目に置いて居る弘法大師は一切の人の心  
の持方を十段に分けまして、その一番下のが凡夫の  
境界、即ち教も道もまるで知らない者。一番上が  
眞言宗の信仰をシソカリ持つて居る者。そのモウ一  
段下の、即ち下から數へて九番目が華嚴の教になつ  
て居る、それより一段下の、下から教へて八番目の  
がそれが法華を信じて居る者。斯ういふ風に十段に  
分けまして、これを『十住心』と申します。弘法大師

は『十住心論』といふ本を著はして居ります。一番  
下が凡夫、だん／＼覺つて行つて八番目が法華經、  
九番目が華嚴の信仰を持つて居る者、一番上が真言  
三番目に當るといふことを言つて居るのであります。  
す、それで華嚴に心を寄せて、法華經を第八に置いた。けれども『事相の時には』事相といふのは實際  
の宗教の儀式をする時『事相』といふのは實行で  
ります。例へば授戒をする。或は又灌頂、といふや  
うな儀式をするのですが、さういふ場合に於ては、  
やはり法華經が大事であるといふことを知つて居た  
と見えて、兩界、即ち今の大胎藏界、金剛界の二つの  
世界を描いた曼荼羅の真中に法華經を置いて、法華  
經を中心としていろ／＼な儀式をやつたといふこと  
である。實慧、真雅といふのは弘法大師の直接の  
弟子で、圓澄、光定といふのは叡山に居りながら

人に授戒をする場合に、何時でも法華經を眞中に置いて、さうして金剛界、胎藏界の本尊を兩方へ掛け授戒をしたといふことてあります。

これも前にもお話したことありますが、一體佛教を信じて本當に佛様の教を實行しようと思つたら、受戒をしなければならない筈なのです。唯道樂にやつて居るのでは本物ではありませぬから、佛様の教を本當に信じて、實際それを實行しようと思つたならば、佛様の前に立つて佛様のお教に背きませぬといふことを誓はなければならぬ。その誓ふといふことが受戒です。戒を受けるといふのは、佛様の教に背きませぬといふ御約束をすることである。今は受戒といふのは禪宗の方だけでやつて居りまして、他の宗ではやりませぬが、私共は受戒を實行しなければならぬものだらうと思ひます。斯ういふ所で集つてお互にやるのは研究であります、本當に佛様の教を信じようと思つたら、佛様の前へ行つてあなたはあなたの領分ですといふことを證據立てる爲です。これを佛教に應用致しまして、やはりこの國全體に教を弘める力があるといふことを證明する爲に、四方から水を持つて來てその人の頂に掛けてやる、斯ういふことをやつた。それが灌頂なのです。はさういふ意味です。灌頂といふのは、お前は教を弘める資格があるぞといふ證明をするものです。それを叡山などでもやれば、眞言宗の方でもやつた

で昔國王が位に即きます時に、使を國境にやりまして、國境の水を持つて來させるのです。其處に川があれば川の水、其處が海なら海の水、谷があれば井戸の水ですが、兎に角四方から水を持つて來さしてその水を一つの壺に入れて、さうして印度の昔は婆羅門ですから、婆羅門が其處へ行つて王様の頂にこの水を掛けてやる、それが灌頂です。つまりこの四方はあなたの領分ですといふことを證據立てる爲

のです。受戒、灌頂といふことは大體さういふことです。要するに受戒の方は佛様の教を心から信じますといふ誓を立てる儀式。灌頂の方は、お前はモウ教を世の中に説く力があるといふことを證明される儀式。斯ういふ風に解釋すれば宜しうござります。さういふ場合に、眞言宗の方でも法華經を眞中に置いてやつたといふことを茲に書かれて居るの

約束をして、決してこの教を輕んじませぬといふことは必要なことです。その代り一度受戒したら、と位は誓はなければ、いゝ加減で済むものではないでせう。だからさういふ意味から言へば、受戒といふことは必要なことです。その代り一度受戒したら、出たらめではいけない。今の禪宗では幾度も受戒する。毎年受戒する人もある。まあ毎年約束をしても宜い譯ですけれども、あれは受戒を幾度もすると功德が多いとか何とか言ひまして、道樂半分に受戒をする人がありますが、それはいけないのです。

それから受戒の式といふものも色々ありますが、又一つ、灌頂といふ式がある。これは今では主に眞言宗の方だけでやりますが、併ながら傳教大師は叙山で灌頂をなさつた。灌頂といふのはどういふのだと言ふと、これは、お前は佛の教が一通り解つて、人に對して説く力があるといふことを證明される儀式です。だから受戒をして又灌頂する。これは一番初めどうして出來たかと言ひますと、印度

決めて、これを復習するのだと言つても、その通り

實行したことはない。少しやつて夜の十時頃になると眠くなつて『明日やれば宜いや』といふので、到頭試験の前の晩になつて『こんな所は出ないから宜いや』などと言つてまるでやらない。それが生憎試験に出たりして酷い目に遭ふのです。さういふ風に自分が決めたことは自分で破れるから、佛の前に立つて誓を立て、これは破りませぬといふあ約束をする位なことをしなければ、凡夫である吾々が本當の信仰を勵んで行くことは出来ない。だから受戒も灌頂も必要でありませう。宗教といふものは唯理窟ではないですから、さういふ儀式も必要であるに相違ないのです。今は何だか皆が理窟倒れになつてしまつて、さういふ儀式をやらないで居るが、せめて受戒の式ぐらゐは實行したら宜いではないか。

お互が佛様の前に立つて誓ふ位のことをしなけれども、天台に歸伏して七年つかへ、廢講散衆して身を肉橋となせり、法相の慈恩は法苑林七卷十二卷に、一乘方便、三乘眞實等の妄言多し。然れども玄贊の第四には、故亦兩存等と、我宗を不定になせり。言は兩方なれども、心は天台に歸伏せり。

そこでその事實を又歴史上の事柄に依つて證明されて、例へば三論宗の嘉祥といふ人は、『法華玄論』

といふ十巻の書物を著はした。この時に法華經を第四時とした。これはお釋迦様の御一代を五つの時期に分けまして、法華經はその一番終ひでなく第四である。一番上よりはその次のものである。斯ういふことを『法華玄論』といふものの中に書いて居るので『會二破二』といふのは、聲聞、緣覺といふ所謂小乘の教を習つて、それを自ら足れりとして居る者を二乘と申します。その二乗を『會する』といふのは、二乘の境界がどの位のものだといふことを説明すること、それから『破する』といふのは、それではまだいけないのだ、本當の大乗の教を學んで菩薩の修行をしなければならぬぞと言つて、小乘の教を聽いて足れりとするのはまだ本當ではないぞと言つて、これを排斥することあります。『會』は説明すること。『破』は排斥すること。この『會二破二』といふことだけは法華經にもある。法華經では成程小乗の教を學んで、世の中の關係を断つて自分一

ふことも考へて居ります。

まあそんなことが始終出て居ります。今の真言宗などでも、受戒の式をやつたり、灌頂の式をやる時には、やはり法華經を眞中に置いて、さうして胎藏界、金剛界の曼陀羅を置いてやつた。斯う言ふの

です。それが當時の事實であります。

例へば三論の嘉祥は、法華玄十巻に、法華經を第四時、會二破二と定れども、天台に歸伏して七年つかへ、廢講散衆して身を肉橋となせり、法相の慈恩は法苑林七卷十二卷に、一乘方便、三乘眞實等の妄言多し。然れども玄贊の第四には、故亦兩存等と、我宗を不定になせり。言は兩方なれども、心は天台に歸伏せり。

それから法相宗といふ宗旨の慈恩といふ人は、『法苑義林』といふ書物を著はした。七巻、十二巻とあるのは、一番初め七巻ありまして、二度目に出しま

す時に細かく分けて十二に致したから。十二卷と言つて居りますが、要するに同じ書物であります。その書物の中に『一乘方便 三乘眞實』といふことを言つて居る。これは前にも一度申上げたと思ふのであります。が、法華經を中心とする方では『一乘眞實、三乘方便』といふことを申します。三乗といふのは聲聞、緣覺、菩薩であります。聲聞といふのは佛の教を聞いて世の中の無常を感じする者。緣覺といふのは佛の教を聞くと共に、自分が毎日出遭ふ出来事に依つて覺つて世の中の無常を感じする者。菩薩と言へば、佛様と同じやうな慈悲心を以て一切の人々に接する者。斯ういふ風に見るとつまり佛教の修行といふものは三種ある。この三種あるといふことは方便である。結局は一乗、どの修行をして居る者もだんだん進んで行つて、大きな慈悲心を具へて佛と同じに成れるといふこと、それが眞實だ。その佛に成る迄の途中の修行として三つも四つもいろいろな修行

をするのだから、三つに分けたのは方便であつて、佛に成るといふことが眞實だ。斯ういふので、法華經を中心とする方では『一乘眞實、三乘方便』と言ふところがこの法相宗の方ではさうではない。人間は生れつき皆達ふのだから、聲聞位で終る者もあるのだ。緣覺位で終る者もあるのだ。中には菩薩で大乗の修行をして佛に成る者もあるのであつて、皆佛に成るとは定らない。斯ういふのが三乘眞實といふことです。これはどうも仕様がない。人間の本性なのだから、世の中を離れて世間に囚はれないで清らかな生活をする位のことで終る者もあるし、中には世の中の爲、人の爲に力を盡す者もあるのだ。これは生れつきだから仕様がないではないか、皆同じに行きはしない、斯ういふので三乘眞實三つに分けるのが本當だと言ふ。それなら何故法華經のやうな一乗の教といふものがあるかと言へば、お前達はトテモ佛に成れないなどと仰しやつたら勉強する者

はないから、佛に成れるぞ、佛に成れるぞと言つて勉強させるので、それが方便だ、それが皆に奮發させる爲の方便だ、一乗は方便だ、斯う言ふのです。三乗が本當で、一乗の皆佛に成れるといふのは我等を獎勵する爲の佛の方便に外ならぬと言ふのです。さう言はれるとそんな氣もしますね。何だか吾々も佛に成れさうもないから、そんな氣もしますが、佛様は『我が如く等しくして異なることながらしめん』お釋迦様は皆自分と同じにしてやるぞと仰しやつてゐらつしやるのだから、それを本氣にしなければならないでせう。ところが法相宗はそんなことは言はないで、三乗に分けるのが本當で、皆佛に成れるといふのは方便だと言つて居るので、これは『妄言多し』本當のことではない。

けれども、この法相宗の慈恩といふ者が『法華玄賛』といふ書物を書きましたが、その中には『亦兩ながら存す』法華の言ふのも良いし、又自分の方の

言ふのも良いし、兩方あつて、皆自分の信ずることにして居る。これは自分が永い間法相宗の坊さんだから、法相宗を止めろとは言はれないから、言葉では兩方に見て居るやうだけれども、心には天台に歸伏して、やはり天台大師の仰しやつたやうに、一切の人間が佛に成るといふことが本當だらうと思つて居る譯である。

華嚴の澄觀は華嚴の疏を造て、華嚴・法華相對して、法華を方便と書けるに似たれども、彼宗之を以て實と爲す、此宗の立義理通ぜざること無し等と書けるは、悔

還にあらずや。弘法も又此の如し。

また華嚴宗の澄觀といふ人は、華嚴經の疏といふ解釋書を作つて、華嚴經と法華經と相對して見ると、法華經の方が方便だといふやうに説いてある。しかし其の書物の中に「彼宗」即ち天台宗では、これを以て眞實だと言つて居る。此宗即ち自分の方の華嚴宗で立てゝ居るところの義理も、天台宗と通じないことはない、同じやうに解釋が出来る。斯う書いて居る。これも妥協的な態度である。自分の方が一番勝れて居ると言つて見たけれども、なほ深く考へて見ると、天台の言つた事でも通じないことはない、大體似たやうなものだといふやうに、非常に弱くなつて、前に言つたことを後悔して取消して居るやうな態度である。

真言宗の弘法大師も亦その通りである。前に申す

やうに、何れも胎藏界・金剛界の曼陀羅の真中に法

華經を置いて、授戒もし、灌頂もしたといふことであるから、よく考へて見ればどちらが正しい教であるかといふことは明かである。

さういふ風に昔からいろ／＼人が出でいる／＼には出ないのであって、天台大師の説といふのは法華經を本にしたものだから、結局法華經以上に出ないといふことは、これは日蓮上人が自分勝手に説明するのではないと言ふのです。支那のいろ／＼な宗旨の本を讀んで見ると、やはり法華經の説かれたことが本當であつて、吾々は馬鹿もあれば、利口もあれば、善人もあれば、惡人もあるが、つまり佛性を有つて居て、佛と同じ性質を有つて居る以上は、速い遅いはあるけれども、結局佛の境界に到達することが出来るものだといふこの教に狂ひがないのだ。斯ういふことを断言して居られるのであります。併ながらその速い遅いがあるといふことは、こ

れは忘れてはならない。その人その人に依りまして、早くさういふ道の解る者もあれば、遅く解る者もあります。何と言つても骨を折らないで覺りの開ける譯はないのでありますから、怠けて居たら、折角佛性を有つて居ても、何時までも佛の境界に到達出来ないといふことは無論の話であります。ですから佛教の中には「難信難解」とあります。法華經の中にも、難信難解とあります。難といふのは骨が折れるといふことです、出来ないといふことではない。法華經を信するまでには骨が折れるぞ、法華經の意味が本当に解るまでには骨が折れるぞ、怠けてプラ／＼して居て解るものではないぞ。それが難信難解といふ言葉で言ひ現はされて居る。そこはシツカリ考へなければならぬ。怠けて、胡麻化して、いゝ加減にして、時々暇な時に南無妙法蓮華經とでも言つて居ればその内に佛に成れるだらうなどと考へても、そんな馬鹿なことはない。本當に眞面目に心を打込ん

て、命を賭けてシツカリやらぬと、佛の教を理解するまでに行きはしない。併ながら骨折れば效果があるので、そこを疑つてはいけない。斯ういふことが言はれて居る。その難といふことを出来ないと解説してはいけないし、又難といふことを辨へないで、居眠り半分でやつても佛に成れると思つて居てはいけないのであって、確に難信難解であります。命に懸けて求めて行かなければ、佛の教の解る譯はないので、そのところはシツカリと、本當にお互の心の土臺を下して考へて行かなればならぬことだらうと思ひます。この事を開目録の中では殊に繰返して説かれて居りますので、この御精神を能く辨へまして、私共も信仰を勵んで參りたいと思ひます。

# 日蓮聖人の顯されたる

## 本尊曼陀羅の意義（二）

佛子河合勝明

十八、本佛應現の根本中心 大聖釋尊の出現 人類の宗教的典型儀表 十九、本佛釋尊の根本經典たる法華經 二十、本門三寶の成立 二十一、本門の僧寶たる上行菩薩の出現 即ち日蓮聖人 二十二、上行日蓮の弘經の內容 五綱教判と三大秘法 二十三、本尊と信行 二十四、本門題目の意義 末法の要法 本佛釋尊三輪の妙化の結晶 二十五、一念三千及び 三輪互融の理による 聲字實相 三塵立行 その信仰意識 二十六、末法の衆生の心理と修行に於ける 最易行にして最勝道としての題目 二十七、末法の最勝甘露門たる題目の要旨

### 十八 以上に於て

曼陀羅の基礎的哲理 に就て概観し、統一的本佛を根本中心とする 一元的説明 を試みたのである。以下は この

本佛本質論を承けて 曼陀羅の重要な部分に關する 更に解明の歩武を進めてみよう。

本佛は三世十方十界に 大自在の應現を爲して、遍く一切の生類を教化救濟せらるゝであるが、吾人人類に對して、

その應現の中心こそは、これ即ち 釋迦牟尼佛 として出現せられたることである。

ひとしく人間として 我等と感覺 情思 情意 欲望 を同じうし、人間の生老病死に、根本的刺戟と 徹底的解決の永遠の道 不滅の勝處を求めて、求道 修學 覺想 諦觀 つひに 大菩提を成就し 佛陀世尊として 如來法王として 総界久遠の光明を掲げ 無上最大の法輪を轉じて 一切人天を導き給ふ 總說横説 周匝圓滿なる 五十年の御説

法 咸風法界を包んで 雄々堂々たりし 八十年の御生涯、

その前半生は 真理の大光明を求めて、無限の大向上を辿られたる 大哲學者であり、その後半生は 大慈の御手を遍く四衆に垂れて 悉くこれを教化し済度し盡されたる大宗教家であり、一切を觀ること平等にして 二無く 爪親順達 彼此愛憎の心あることなく 貪著なく亦限礙なく 一人の爲にするが如く衆多にも亦然なり 智愚利鈍 貴賤貧富 老若を選ばず 男女を問はず 常に法を演べ説きて曾て他事なく

遊行するに畏れ無きこと師子王の如き 大勇者 大丈夫 胜一切者 梵釋も隨順し 魔神も降伏して 佛守護を誓ふに至らしめたる 大威力者、右手には 降魔の利劍を揮つて 人間心奥の惑源を撲破對治し 左手には 悅樂正善の文明的大理想を提げて 披苦興善の大佛事を行じ、進んで 大涅槃

解脫の大覺界に向はしめ 上らしめ 摂化し 引導せられたる 大經世家 大教濟者、廣敎多岐なりし その一代の行化 諸然として旺なる、眞に是れ 人類の典型的人格 時空を一貫して 萬古不磨の大權威を有する 人類儀表の大人格と稱すべきである。

十九 釋尊のかくの如き 如來の威神 活力 感化は 佛弟子 及び 佛祖の信奉者に 無限なる形益 身輪の妙化を感じせしめ、更に 世尊の説きたまひし 總說横説八萬四千の教法は、また無限なる聲益 口輪の妙化を施して ひとしく在し 無窮に活動しつゝ しかも常にこの法華經 この如來

壽量品を以て、三世說法の根本中心として、無量教法の最高統一として、一切衆生の徹底的教濟教として、十界皆成佛道の根本法輪として、即ち、三世十方無量の諸佛も同じく、この妙法華經を行じて、佛果を成就する。修行も證悟も教法も濟度も、ひとしく法華經より出で、また、法華經に攝まる根本因果の一實大道、本因本果、至上至妙の甘露門として、即ちいはゆる。

大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念の眞淨大法、として、而てこれら諸佛を悉く結歸しては、即ち眞に諸佛總統の一大本佛釋迦牟尼如來内證護念の一大本法、として、法界無量の義門、無數の經典、無盡の教法、人文史上幾多の思想教説等を、悉くこれ序とし、悉くこれ流通分としたる、法界唯一の正宗說法となり、

これを、本說法妙、と稱し、本佛の本法と稱して、三世不改、十方不變、世々番々の出現妙化の眞實統歸として、法界絕對の根柢經典として、開顯せらるゝに至つたのである。

二十、是の如く、佛身の本體が開顯せられて、釋尊本佛本尊の根本義が確立し、この絕對本佛の唯一無二の教法として、即ち、本佛の絕對性を説き明したる經典そのものの絕對性が亦、開顯せられて、法華經本法の根本義が確立し、更に進んで、本佛釋尊は、この法華經を説いて、在世當時の佛弟子を深高の佛慧に入らしめられたばかりでなく、自ら滅に非す

して滅を現する、我が大涅槃の滅後に於て、正法、像法、殊に、末法の時代の衆生のために、この法華經の要旨を結んで、

・如來一切所有の法（妙名）

・如來一切自在の神力（華用）

・如來一切秘密要の藏（法體）

・如來一切甚深の事（蓮宗）

皆、此經に於て宣示顯説す（經教）と、本佛の眞實、空寂、名、用、體、宗、教の五重の深玄微妙の意義、いはゆる五重玄義を範めて、

妙法蓮華經、といふ、五字一音となし、

しかも是を、本佛釋尊の第一の高弟として、本佛に根本的に教化せられ來つた、本化的菩薩、いはゆる五百塵點劫といふ悠久の昔より、このかた、一念も佛を忘れ奉らずして、釋尊に親近し師事し來つた、上行菩薩等に授與し、懇に惡世未來の普りに、忍辱辛酸を貢いての、この法華經弘通を囂果せられたのである。

此に於て

・佛教根本の三寶が定まり、信仰修行の歸依處が明かとなるに至つた。即ち、

・釋尊は本佛にして、佛寶であり

・法華經は本法にして、法寶であり

上行は本化菩薩にして、佛寶である。

この三寶は、一に懸つて、法華經如來壽量品に於て、釋尊の本佛たることが開顯せられて、その眞實根本の覺たる、本覺の内容が説かるゝに及んで成立したものであり、而て

・佛道修行の一切衆生が、必ず能通、能入して、また同じく、その我が心性の實體たる、この本覺の内容を證得すべき門乃至、堂奥であるから、これを、その教理的内容よりして

・本覺門の三寶と稱し、これを經典の説相たる、即ちいはゆる教相の上より名けて、法華經本門の三寶と稱するのである。

二十一、佛教の根柢眞實にして、最高統一的大教義は、かくして法華經に於て、究も雲霧を披いて天日を仰ぐが如く、堂々として、如來法王みづからの金口に依りて光顯せられ、加之如來の滅後に於ける、佛法特に法華經の弘傳流通及び、その弘教の導師、上行菩薩等の末法出現に至るまで、整然として一絲亂れず、三世了達の大佛知見に由りて豫言せられるに至つた。

果せる哉、佛說正に違はず、末法の惡世、闇諍熾盛にして、諸宗諸派四分五裂し、國家も社會も亂雜混沌として、内外騒然たる時代に當り、社稷教法の狂瀉を既坐に因す、擾亂反正の大巨人、佛祖法統正脈傳持の一大教傑現れ出で、法華折伏、破壊門理の法幢を驅へし、快刀亂麻を斷つが如く、

・惡口罵詈、擯出流罪、數々身に加はるも

我不愛身命 但惜無上道  
一心欲見佛 不自惜身命  
身輕法重 死身弘法

寧ろ身命を喪ふとも 教を匿され  
折伏逆化は時の不祥なれども 佛祖の教勅もだしがたけれ  
ば、勧持の豫讐 法華の一經を悉く色讀しつゝ その弘むる  
ところは

五綱教判 三大秘法 深く 佛意に契合し、密に經旨に符  
應して 本化別頭の教觀を高調し、

如來の滅後に於て 佛の所說の 經の因縁 及び 次第を  
知つて 義に隨つて 如實に説かんに 日月の光明の 能く  
諸の幽冥を除くが如く 斯人世間に行じて 能く衆生の闇を  
滅し 無量の菩薩を教へて 畢竟して 一乘に住せしむ

而もこの佛法の大教義を提げて 皇國國體との根本的融合  
を教へ 開顯統一の大理想を發揮し 王佛一乘の大德教を樹  
立して、法を知り國を思ふ、立正安國 法國冥合 一天四海  
皆歸妙法。その中心たる 我大日本帝國に 轉輪聖王 四海  
統治の權威を確認し 使命を宣揚し、以てこの萬邦無比の國  
體に 無上神聖の教法を捧げ 即ち 有形の國家に 久遠心  
靈界裡の大權威を賦與して 皇國を根本的に莊嚴し、同時に  
この萬邦無比の皇國をして この無上神聖の教法を 徹底  
尊重し護持せしめて 無形の道法に具體的無限の威力を加へ

勢力を發揚せしめ、かくて 教法の神聖と 國家の靈威と、  
道と國との何れの絕對をも ひとしく確認しつゝ 而も 兩  
者を 最尊無上なる大教義の最深根柢よりして 融合開顯統  
一し、而て一闇浮提第一の本尊を 我皇國に顯發し 先づ自  
ら 本門の題目を行じ 更に戒壇建立を此最勝靈國に豫言し  
進んで遠く 宇内人類 文明道義の大統一を誓願したる

一面より見れば 護國の柱石 黎民の先覺

一面より見れば 無比の聖者 千古の法將

一は 國祖天照大神の護國の使者として 我が國體の大義  
名分と その本質真價を 最高度に發揚したる 尊皇愛國の大忠臣

思想興國の大先覺者

一は 本佛釋尊の如來使として 佛祖の法統正脈と その

神體魂魄を徹底的に發揚光顯したる 佛教復活の一大法將

法國 無窮の大恩に報答して

一は 萬世一系の皇恩に應へ 遠く祖先の遺風を顯彰して

遙かに國家の將來的大理想を光揚し、據つて以て 惟神道

の精髓を體現したる 億兆國民の典型的大人格 日本精神の

絶好模範

一は そのかみ靈山會上にして忝うせる 本佛釋尊の懲薦  
なる遺命付囑に應へ 正法傳燈の先聖の遺獻を發揚して、我  
等人類が 久遠の生命の大向上を通りて 競に 絶對の大覺

菩薩を成辦すべき 佛道修行の儀表的大人格 菩薩行實踐の

### 根本師範

是の如き 神佛二道の代表的人格となりて その根本的解  
決を成し遂げられたる者こそ 實に我が

日蓮聖人その人であり 日蓮敎學そのものであるのであ  
る。

### 南無妙法蓮華經

二十二、日蓮聖人は 佛陀 及び 諸先哲の 風に豫言せら  
れたる聖者 上行菩薩として應生し、この上行の使命たる  
佛教の最高解釋權を握つて 総合的開顯統一の佛教觀を提  
唱し、以て 印度 支那 日本 三國 二千年の佛教史上  
前賢未發 光前照後の大教義を樹立せられたのである。

### 聖人の教を弘むるに當つては、先づ

宗教の批判探求原理として、五綱教判と稱する、即ち、

### 教法の淺深 權貴より 進んで 開顯統一の教義を定 むるのである。

### 機 案生の教を受くべき宗教心理

### 時 時代の動向

### 國 國家の體性

### 教法流布の前後、宗教進化論的文化

### 歴史的傳燈的文化

### 歴史哲學的洞察

の五方面を具さに大觀して、然る後に、  
佛教の理論的構成統一の組織的大敎學として、また

佛教の實踐的信仰修行の三大軸範として、

個人 としては、吾人の人格そのものゝ内に 本佛の感應

### 本門の本尊 と

### 本門の戒壇 と

### 本門の題目 と

### 三大秘法 を 顕發建立せられたのである。

本門 とは、前にも言へる如く、

本佛の本覺 即ち 佛陀の眞實の悟の顯れた處 よりし

てこの三大秘法が成立したものであるから かく名ける

のである。而て その

本尊 とは、根本尊崇 本來尊重 本有尊形 の義にし

て、吾人の信念の對境 を指すものであり、この

本尊の教權として 佛陀の經證は

法華經如來壽量品 にして

本尊の形は 即ち 大曼陀羅 であるのである。また次

に 戒壇 とは、戒は規律にして 本尊たる本佛を信仰するこ  
とであり、壇は場處の義であつて、從つて  
信念即戒 にして、吾人信行の處即ち是れ戒壇 と成るの  
である。それ故

個人 としては、吾人の人格そのものゝ内に 本佛の感應

を仰いで、その來臨應現せらるゝ壇場となすべく、家庭としては、一族の信仰を捧ぐる佛壇が、即ちまた寂光を影現するものとなり、

國家・社會にあつては、この戒壇建立が即ち、風教の依止處として、一國精神文化の中心統歸たるべき、即ちいはゆる國民精神作興の根源たるべき一大德教の樹立尊重せらるゝ根本道場たる意義と權威とを發揚するに至るのである。

更に進んでは、是の如き

大本尊奉安・戒壇建立の國家が、

世界人類の上に儕存しては、是の如き國家こそ道力、勢力併せ合し、文武一元、靈威恩德、兩つながら兼ね備へて、世界人類の文明道義の根本的護持者となり、普遍的發揚者となり、即ち一切の中心統歸となりて、宇内に君臨し據つて以て世界平和・人類福祉を擔保する、絶大の權威を發揮するに至るであらう。而て第三に

題目とは、本佛護念の本法たる法華經の魂魄にして、しかも此内に本佛の大功德教濟力を範められて居るのであって、本尊即ち本佛を信仰するに當り、まさしく本尊より授與せらるゝ戒體であり、我等は是を受持し金持し、即ちいはゆる受戒して、この題目を「信念口唱しつゝ」これを信仰生活の最善形式として、佛道に精進し、人生に奮闘するのである。

ち

題目は、本尊の形式としての曼陀羅を總括すると共に、この本尊に對する我等の信行としては、即ち法華三味の妙智を包める觀念と信仰と（法行と信行）の一如せる大信仰であり修行である、即ち信智一如の信行である。

また吾人の菩薩行としての衆生みづからの因分の智慧と信仰とが一如するばかりでなく、むしろ久遠無始常住實在の本佛釋尊の妙覺極果の難思議の佛智を無始本有の大悲化他的勝用として、我等の衆生の心田（佛種）に下種せられ（乘佛種）、こゝに我等の佛性が開發し（性乘一如・因緣感應）以て我等はこの大信仰を渙發するのであり、又從つて更に、この信仰が發展向上し、完く成熟して、同じくまた佛智菩提・無上の妙覺を成就するのであるから、實に本佛の果分の妙智慧と我等の信仰とが、一如し、即ち又

本佛の智慧と我等の智慧とが、一如して、信智一體と成るのである。換言すれば

本佛常恒の智願より出づる下種益の妙智を信受し金持して成立つところの、佛智ながらの我等の信仰であり智慧であるのである。從つてまた

題目は、教（信念）觀（智慧）不離の題目となるのである。

**二十三、三秘の綱要は**かくの如きものであるが、宗教學上宗敎的主體、即ち吾人の信仰と宗教的客體、即ち信仰の對象との兩者に分てば、

題目は、宗敎的主體に當り、本尊は宗敎的客體に當り、この本尊を信仰して、題目を受持口唱する處は、即ち戒壇である。即ち此に於て、主客一體となるのである。また更に

本尊は、本佛を表し

戒壇は、本佛常居の淨土を表し、

この本尊と戒壇との、即ち、信仰修行の目的としての佛身と佛土とを顯發すべく、この兩者を一括して蘊在するものが即ち題目となる。而て

本尊即ち正報たる本佛に、依報の淨土たる戒壇を攝し、本尊と題目とを相對するときは、これが、前述せる如く、日蓮敎學に於る宗教的客體及び主體としての本尊と信行といふことになる。

更にまた、隨順・決定・不動等の必地を能觀、能信の心相として、題目はこれに對して所觀所信の對象となり、本尊（及び戒壇）をも統一するものであるから、かくするときは、

三大秘法は、悉く題目に攝まることとなる。かくして即

かくして

日蓮敎學の信仰、否實に、佛教の信仰とは、本佛釋尊を信仰して、この明確不動なる信仰意識のもとに、題目を受持する一行に統一せらるゝこととなるのである。

それでは、抑もこの題目とはいかなるものであるかを、更に詳説せなければならぬ。

**二十四、本佛釋尊は**人類を救濟せんがために、我等が人界に出現し、縱横八萬四千の法門を說いて、竟にこれら無量義を、一妙法に統一し、即ち妙法蓮華經に於て、自ら佛身の本體も、宇宙の實相も、衆生の本質も、迷信の因果も、佛道修行と得益も、乃至一切の教を皆、この妙經に顯説し且つ統一し、以て、在世の佛弟子を引導して、濟度の大佛事を了せられたのみならず、滅後無量の末第衆生、法子法孫のために、これらの教義一切を包羅して、一大要法となし、これを滅後、就中、末法のために諸菩薩特に、上行菩薩に囑累せられたのである。

此に於て、上行菩薩は、本佛の遺命を畏んで、果して滅後末法の惡世に、殆どあらゆる佛教の信仰修行の分派發展した國家たる、我大日本帝國に、日蓮聖人となつて出現し、蘭菊と咲き亂れたる諸宗を破邪顯正して、悉くこれを法華一經に統一し、而もこの妙經の諸の大教義を、たゞ

妙法蓮華經の五字一言に攝盡し、これに絕對の歸依渴仰

を捧ぐる意味に於て

南無妙法蓮華經 の一聲七字となし、これを以て  
法華の妙經 一帙八軸四七品 六萬九千三八四文字 一々  
文々是真佛 真佛說法利衆生 の妙旨を包涵したるのみな  
らす、

如來一代五十年の說法 經横八萬四十無量の義門を包含し  
乃至 法界無量無數 微塵の經々を蘊在し、以て、  
天地宇宙を盡該し 三世十方を貫串して、萬古不磨の體道  
と 隨應無窮の用道とを 統括し 無限教濟の活力を發揮す  
る 一大要法 とせられたのである。これが即ち 本門の題  
目であるのである。

抑も 如來釋尊の出現せらるゝや、その 大人格的威力よ  
り發する 身輪の行化 無限の形益と、口輪說法の聲益 一  
代の佛教 究竟しては 法華一乘の妙教 就中 如來壽量の  
一品によりて、在世の佛弟子は悉く 得道・得脫し了つたの  
である。

さて 如來滅後の佛子・法孫は 抑も何によりて得道すべき  
や。我れ相を以つて 身を最り 光明世間を照し 無量の衆に尊  
まれて 爲に實相の印を説く 如來威神の尊容を 眼前に拜  
すること能はず、その絶大の德風 無限の感化 絶對の智悲  
整齊の行軌 に接する能はず、はたまた その梵音雷震す

る無上の轉法輪を まのあたりに聽き 或は 慈愍溢るゝ教  
誠利導を忝うすること能はず 懇懃渴仰の思ひ彌増りて 一  
心に佛を見たてまつらんと欲して 自ら身命を惜まず しか  
も 如來は常に此に住したまひながら 顛倒の衆生をして  
近しと雖も 而も見えざらしめらるゝのである。

南無妙法蓮華經の七文字は 如來身輪の妙相に代り 南無  
妙法蓮華經の一聲は 如來口輪の梵音に代り 末代佛子の大利潤を蒙るべき 大因縁 勝因縁 大善知識 大教濟力と  
こそは成つたのである。

かくの如く 題目は、これを廣げれば、如來一代五十年  
說法の全内容、大藏一切經 乃至 三世十方の諸佛微塵の經  
々となり、

これを略して 一に統ぶるときは、これら法界無量の經典の  
根本正宗たる 法華一經となり、更に この法華經中の 中  
心要法をとれば、如來壽量品となり、至極して 要中の要た  
る魂魄をとるときは 即ち

南無妙法蓮華經 の五字七字となるのである。即ち この  
五字七字そのものが

廣略要 要中の要

として、全佛教をこの題目の一言

に統べ、無量の經典の 無量の教法を 統歸したる 一大教  
法である。

而て我等が口に唱へ耳に聞くこの一聲は、本佛色身の妙化を留  
め 我等が口に唱へ耳に聞くこの一聲は、本佛口輪の妙化を  
留め、しかのみならず 本佛の魂魄たる教法としての 妙  
法の内容としては、法界實相の大哲理たる 事の一念三千の  
法體を根本とするはいふまでもなく、更に これを證得せら  
れたる本佛の大智慧も、また衆生一々の心行 罪福苦樂の業  
縁を 徹見せらるゝ 本佛自在の靈機三昧力も、而てまた  
理智一體 靈機三昧となれるところよりして、この法界三千  
の妙能を 運用し發動する 本佛感應の大慈悲も、この大慈  
悲の發動の成果たる慈善根力も 功徳力も 神通力も 救濟  
力も 總じて 一切の佛力を包含し 並に 包含するのみな  
らす、實際にその感應教濟の威力 妙用を發揮する 不可思  
議神通の 題目であるのである。

この題目は本佛のものであるのである、本佛の手にあり  
口にあり 意にある題目であるのである。しかも この題目  
を通じて 衆生と本佛とが、即ち 我等信仰の佛子と本佛釋尊  
とが感應道交するのである。この時 本佛釋尊の 無始無點  
久遠以來 三世十方 法界遍滿の大智慧・大慈悲 一切の  
功徳力を 我等は本佛より授與され 受得して 救濟され  
佛性を開發して 無限の大向上を通り、竟に 本佛五百塵點

の妙行を 一念至信の中に縮め得て 本地の妙境 一時に成  
就する に至るのである。

この妙法 この題目は 本佛より我等への 救濟の綱であ  
る、毒病に苦悶せる狂子への 是好良藥である、我等の無始  
無終の苦惱を除く元品の無明を切る大利劍 生死の長夜  
を照す大燈明である、

この妙法は 本佛の佛智の妙法である 圓慈の妙法であ  
る 功徳の妙法である、感應の妙法である 救濟の妙法であ  
る 本佛釋尊の如來秘密神通之力の妙法である 本佛の血液  
本佛の肉團 本佛の骨髓 本佛の魂魄たる妙法である 本  
佛の活力の満ち充ち漲り満るゝ 十界皆成 萬法根活の妙法  
である。

妙法の題目は その色相の文字に於て 本佛妙色身の感化  
を蔽し、その音聲の言葉に於て 本佛大說法の感化を蔽し、  
この色相と音聲 一言七文字の内容に於て 本佛意輪感應の  
大慈悲功德 無窮なる神通教濟力を包藏し發動するのであ  
る。即ち

釋尊が親しく現世に出現說法したまうた その身口意三輪  
の妙化そのもの に代つて 而もこの三輪の教化利益の神通  
威力を籠めたるもの 結晶したるもの である。

二十五、抑も何故に かくの如く、

現身說法の釋尊そのものの、大人格や 大精神や 莊嚴身

や 轉法輪等の大感化力 大功德的教導力を 声と文字の中に含むことができるのか。

それは、一念三千といふ佛教最高の法華經哲學によつて質的・客觀的のものにも、即ち 物・心 何れに於ても 如何なるもの一微物に於ても 宇宙法界の全内容 いはゆる本有三千の内容を 具有するものなのである。

そこで今、特に精神的内容が物質的のものに表現せられた言語 音聲 文字 に於ても、亦かくの如き 法界三千の内容 乃至 真如法性の全體が 含蓄されるのである。

音に 全宇宙が含まれる といふだけではない、この全宇宙を 本佛釋尊の無窮の圓慈 大功德力によつて功德化された その功德的宇宙 佛乘的宇宙 圓慈の法界そのものを この妙法の題目 一聲七字の中に含むのである。

否 功德的宇宙を含む といふよりは、むしろ 宇宙大の功德 法界遍滿の四慈の中心的にいふならば、その法界遍滿の四慈功德の全體を、悉く 一大人格に結晶體現せられたる本佛の大功德を、この一言の妙法 七字の題目に含むことができるのである。また

本佛三輪のはたらきは 自在無碍にして 相互に融通一貫するが故に、その大慈意輪の精神的全内容 智悲功德救濟の大意志力を 直

ちに 身輪の妙相に代る 妙法五字七字の色相の文字に包み 篠め、口輪の說法に代る 題目一言一聲の中に包み篠め、以て この功德的聲字 圓慈佛乘の一言七字を通して 無限なる形聲兩益を施す 衆生救濟の大佛事を成すことができるものである。

かくの如く、

本佛證得の一念三千 乃至 聲字三千 即ち 聲字實相 及び 三輪五融 の原理によつて 妙法の聲字に、

法界の真如法性 その功德化せられた 本佛の法力 四慈 救濟力 を含む ことが信解せらるゝのである。

一人格には、眼耳鼻舌 身の五官 いはゆる身體の五根と 心 即ち意根との 六根を具へてをり、その對象たる客觀界は、即ち、色聲香味觸 法の 六塵と稱するのであるが、

吾人間は、求道・精進するに當り、眼耳意の三根 利にして これによつて修養・向上し得るのである。

それゆゑ 本佛の人類救濟のための 是好良樂の妙法の題目は、吾人間の 眼耳意 三根の對象として 色塵 聲塵 法塵である、しかも その徹底最高の 佛乘化せられた三塵であり

本佛に活用・妙用せらるゝ三塵である。即ち 本佛三輪の妙

化の結晶としての題目であるから

南無妙法蓮華經の七文字は 天地宇宙の森羅萬象中 色塵の最上乗なるものとして 我等に 觀佛三昧の力を發揮して こゝに 見佛の功德を包み與へ、又 南無妙法蓮華經の一音聲は 天地宇宙の森羅萬象中 聲塵の最上乗なるものとして 我等に 總持王三昧の力を發揮して こゝに 聞法の功德を包み與へ、而て 南無妙法蓮華經の大精神は 天地宇宙の森羅萬象中 法塵の最上乗なるものとして 我等に 念佛王三昧の力を發揮して こゝに 本佛と感應道交の功德を包み與ふるのである。これを 三塵立行の妙旨 と稱するのである かくの如く

本門の題目 南無妙法蓮華經は、その實體本質内容に於て (法體)、本佛大慈意輪の全内容を含み、その形式たる 色塵の文字と聲塵の言語に於て、本佛意輪の感應より發する 今番人界への出現と行化 乃至 遍き十界應現の妙用 身輪の形益と、四攝八音の說法 八萬四千無量義の教法 乃至 遍く十界の一切に瓦り 衆生發菩提心の勝緣となるべき 微妙の言語音聲 口輪の聲益とを含み 且 發動するものであるのである。

かくの如き 題目の信念口唱は、これ 我が聲にして 而も本佛の聲であつて、即ち 本佛の我等教濟の姿であり、又これ 本佛の聲にして 而も我が聲であつて、即ち 本佛に

滅後末法の時代にあつては、五十年說法の本懷 如來

この一經の玄旨

一品の文心を

たゞ一言に籠めたる 題

目の要法 となつたのであつて、これ全く 佛法弘通に當り

着眼缺くべからざる 時代 及び 社會の推移變遷と こ

れに相應する 人間の宗教心理 等を具さに考察したる 本 德 力用等は詮顯し 開出さるゝのである。

化上行日蓮聖人が、かくの如き 佛教實踐の方法として

最易行にして且つ 最勝道（六波羅蜜在自然在前 乃至

釋尊の因行果徳の總てを含む）を弘通したのであり、しか

も かかる修行法は、密に深く

佛意に契合し また 南岳 天臺 妙業 傳教等 正法傳

燈の芳躅を相承し、これに 本化開顯の智眼より 獨特の宗

教的內容を盛込み 以て 上述する如き

題目の甚深微妙の意義 本質 德性 力用 を構成するに

至つたのである。而て

ただ一言の音聲 七文字の色相に過ぎざる題目を以て 法

界的根本經典 根本教法となし、法華壽量 乃至 無量の經

典と教法を 悉くこゝに含ましむるが故に、これを

聲と色とを經と爲す 卽ち 聲色爲經 と稱するのであ

る。

此に於て 本門の題目 妙法一言の聲字と 法華一經の全體 譬量一品の心髓とは、同じく 法界の根本經典 中心教法 卽ち 本佛宮住の 正宗設法として 何等の異り無きことが知らるゝのである。たゞ然しながら

題目は 所詮の要旨であつて、これに對する

能詮の教法は 法華經であり 譬量品であるのである。即ち 法華經壽量品の大教義によつて 題目の法體 性相 功

2 法華經全體 乃至 全佛教 全法界を 摄盡統一したる  
一大教法として 本門の法寶であり、その内容は  
3 釋尊の因行果徳の二法 乃至 總じてこれをいへば 無始本佛釋尊の 無始本有の妙能・勝用たる 素生救濟の大功德力を包藏したる 功德的教法 救濟的教法であり、  
4 即ち 三世常恒に 素生の心田への 下種の導師たる 本佛の 果分の妙智願の下種益たる妙法であり、  
5 その一音七字の聲色の二面に於て

現身說法の釋尊の 意輪感應より發する 身口二輪の妙化を留め宿し、加之またその 現滅非滅 常在靈山の 生身の釋尊に值遇したてまつり はたまた生身の釋尊より聞法してまつる と同様の功德力を發揮して、以てこの常住常照常說法教化的本佛釋尊に對し 素生をして見佛聞法の勝縁を結ばしめ、形聲兩益の功德を授與し 聲色爲經の妙義を發揮し 持經即持佛身の勝能を獲得せしめ、

6 この題目を通じて 素生と本佛とが靈的交通する 生佛感應道交の法印であり これによつて

7 十界五具の實際 ことに 素生と本佛との人格的・精神的  
五具五融の實證が この題目の信念口唱の當處に成立し  
また

8 素生相互の間に於ても 自行化他に亘つて行ぜらるべき  
題目の信行 であり、自他兼濟の威力・活力を 包藏し發揮

するものであり、

9 究竟して その根源を尋ねるときは たゞに 我等自身の  
金剛不壞の決意・信念たるのみならず 實に 本佛みづから

我に 我が信仰を決定信として 決定し印可せられたる 即ち

我への本佛の印可決定信として「授與」せられたる題目  
であり、この本佛の授與によつての 我が題目の「受持」で  
あるのであつて、かくして即ち

10 受戒戒法に於て 本佛を信仰し 本佛の妙戒を受持したて  
まつる我等に對し 本佛より授與せられ我等が受得し念持す  
るところの 本佛の 而て同時に 我等の 戒法戒體 とし  
ての題目 であるのである。かくて

11 この題目の信念口唱は 我等が信仰生活の最善形式にし  
て、即ち我の信仰告白の姿として、本佛をして我に必至に感  
應せしむる決心力として、信仰の純粹把握の集中力として、  
音聲は 最も人間精神の強烈なる表現であり、率直・純真・公  
明なる表現であり、また最も人間精神に強烈なる感化力を與

ふるものであつて、 古來  
聲 佛事を爲す といひ、  
娑婆世界は耳根得道の國 といひ、また  
耳に壓て縁を成す 等といはるゝは、これら上述せる如き  
幾多の妙旨を道破したるものにして 即ち  
12 この題目の梵音の展轉して窮り無きところ  
生佛に瓦り 自他に瓦リ 十界に瓦リ 全法界に瓦つて  
無限なる感化教濟の威神と活力を 顯發し成辨することを  
斷じたる 千古の鐵案である。  
経に云く

經の威力を以ての故に 強ひて化して信ぜしめん等々

昭和十三年夏 信州八ヶ嶽の東麓 松原湖畔に草し  
四年沾洗中二 圣應院日生恩師の 第九週忌展墓の日及  
び明日いさゝか鑿記す  
(つづく)

普見  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×

四一

# 宗教團體法案議事錄 警見

議部 満事

去る二月二十三日、かねて問題の本法案が衆議院に附議されたことは、世間でも知られてゐるが、その二三の議員等の辯論を聞いては黙ることが出来ない。爰に卑見を述べて識者の御一考を煩はし、夫等の反省を促がす次第である。

(一)

始めに高見之通君の質疑に於て『宗教トハ何ゾヤ』に對し、當局では『一般社會通念ニ於テ宗教ト認メラレルモノヲ宗教トシテ取扱フ』といふ答辯に遺憾の意を表し、宗教としての本質的特質、即ち宗教の定義と云ふものは『私ノ考フル所ハ三ツノ要素ヨリ成ツテ居ルト思フノデアリマス、ソレハ第一教義、第二信仰、第三儀式デアリマス』と述べられてゐるが、果してそれを以て宗教の

本質、宗教の第一義とされるかと申せば、これ等は第二義に屬することなんである。宗教の本質、第一義は信仰の對象となる本尊のことと、之を信する人のことである、即ち佛陀觀と人身觀が宗教の本質である、而して是等に關して教義といふものが説かれて來るのであり、從つて行法が起るのである。

處がこの佛様の御事並に人間に關することはさう簡単に解らないからこれを教門の難信難解とされて居る。又佛性論になつてその普遍、佛性體遍がこれも會得され難い、それを觀門の難信難解とされて居る。これが理解出来ないから偶像崇拜だといつたり、墓参りを嘲笑するやうになるのである。皆學問の未熟からで恥づべき事と思ふ。須らく宗教を論するとなれば、聊かでも事の一念、事

の三千に對する知識がほしいと思ふ。御再考を煩はす次第である。

それから高見君は『教祖ノ特質ト教祖ヲ信ズルト云フ所ニ分派ヲ生ズルノデアリマス、釋尊ヲ教祖トスルト云フノト、基督ヲ教祖トスルト云フ所ニ、佛耶二派ノ分派

が出來タノデアリマス、我ガ日本ニ於キマシテモ、或ハ日蓮、或ハ親鸞、或ハ弘法大師、支那ニ於キマシテ達磨、臨濟ノ亞流ヲ波ム禪宗、ソレ等ノ教祖ヲ中心ニ、其ノ言行ニ滿腔ノ崇拜ヲ拂ウテ、ソコニ色々ノ分派ガ生ジタト言ウテ宜シト思フノデアリマス、ソレ程ニ教祖ガ尊イノデアリマス、隨テ教祖ノ遺シタル種々ノ奇蹟モ亦其ノ偉信仰ノ標的トナルノデアリマス』と。斯様のお説は宗教のことに就て殆んど認識のないとの様に思はれる。凡そ佛教内の分派などといふものは、釋尊の教法に於て、その一部分に執はれた偏見からである。一代聖教に就てどれが眞實の教であるか、方便の教であるかといふ見解を謬つてゐるから起るものなんである。佛教は始め一法

から發し、擴がつて多くの法門は説き出されたが、再びこれは一に歸るべきことが極めて明瞭なんで、隨他意隨自意といふことを見定めて行けば誤解したくも出來ないのである。それを自力だとか他力だとかいふから間違つて来る、そんな分類法はあり得ない。

されば佛教に於ける教祖は釋尊唯お一人である。日蓮、親鸞、弘法等は開祖といふことがあつても教祖ではない。而して奇蹟を其偉信仰の標的とするに至つては迷信助長の可能性が十分にある。苟くも教主釋尊の大業を濟度なさる大慈悲心は、皆佛智に向上せしめんが爲めに大きな教化を與へられたので、利根や通力を尊ぶ類は婆羅門外道である。佛教とは道理なりで、哲理の上に樹立され過去、現在、未來を一貫した明教である。従つて佛教の中には道德の教は悉く容れ得るが、道德の中には佛教は溢れて入れ切らない、恰度一合碁に一升の水を入れんとするやうなものである。佛教は疾く言ひたらんには政道の法をかしといふことがあつて、一切の政治も道德

も、經濟も、文藝も武事も等々悉く皆包容して餘りあるものなんである。基督教などは奇蹟が宗教の特異性などと考へてゐるが、佛教では佛陀も正面から堂々と因果の理法に基いて教へられ、諸法の實相を述べ、深淵なる佛智を悟ることなく縷々懇説され、妙化を布かれたものである。このことを充分研鑽して戴きたい。

高見君は『宗教ノ使命』に就て細々お述べになつてゐるが、所詮佛教は法國冥合の信仰である。正しい宗教の信仰こそ、その國家を興隆ならしめ、世界の人類に共存共榮の實を擧げしむるものなんである。地上に樂土を顯現せしむるものなんである、通じて一佛土化するものなんである。

## ( ) ( ) ( )

次に斯波貞吉君は『宗教ノ信仰ト云フモノハ、丁度人ガ寝テ居テ夢ヲ見テ居ルヤウナモノニアリマス』と申されて居るが、宗教の信仰の尊嚴を存じないから斯様な愚論が出るのであらう。而かも淫祠邪教や迷信の類を若

ら。いつ迄も東洋の一孤島に籠居してゐるやうな考へ方は、只今限り廢して世界の日本でなく、日本の世界といふ見解に立つて論義し指導されたいものである。無論かく申しても決して教育勅語を輕んずるといふ意味では毫末もない、この聖訓を如實に遵奉せしむる根本精神を發揮せしむるには、矢張り宗教情操を必要とする事荒木文相のお説の通りである。夢のやうな信仰でなく、覺醒した發刺たる信仰を體験されたいものである、それには私共の正定聚に加はつて、心靜かに眞淨の大法を握んで頂くことを希望する。

## ( ) ( ) ( )

次に曾和義式君は『若シ釋迦言説ノ一言一句モ棄テル所ナク我國ニ當歌マルナラバ、此ノ教コソ我國ニ取ツテハ絶對的ノモノデアリマスガ、然ラザル限リニ於テハ絶對的ノモノデナイ、隨テ絶對的ノ教テナイモノヲ説イタ當體ヲ絶對的ナ境地ニ祭リ上ゲテ、之ニ禮拜スルノハ僕ハ如何ナモノデアルカト思フ』と申されて居るが、曾和

干列舉されてゐるけれども、そんなものと正信を混同すべきでなく、そこに此の法華の重要性もありたいものと思ふ。古來から我國史を通じて和氣の清麿公や菅原道眞公、北畠親房卿や補正成公乃至徳川光圀卿や東郷元帥等の御人格の基礎は何處から發露せるものかを伺ひたい。申す迄もなくその非凡の浮華は實に佛教信仰からではないか。寢て夢見た寝ぼけ頭で何が出来るか『信は道の元徳の母』と申されて居る、たとへに事かいて寢て夢見てゐるやうなものが信仰だといふに到つては斷じて許すことの出来ない文化史上の賊である。死して惡道に墮ちて無間の苦痛をうけてから泣いても及び付かぬであらう、切に反省を促がす次第である。

宗教の價値を存じないから『文部省ハ飽クマデ教育勅語ノ一本調子デオレ』と力説されてゐるが、實に單調な世相の觀方である。『日本とは世界なり』といふことは夢想だもせられまい。モット思想を伸ばして戴きたいものである。今は既に大陸に乗り出しているのであるが、

君は教法に對する見方といふものゝ心得がない様だ、申し換へるならば人と談合する場合でも、對手がどの程度眞氣で申してゐるか、どこ迄は政略であるかを辨へずに、その一言一句を全部許容した時には思はぬ失敗があるであらう。殊に佛教の如き活潑な教を拜する時には、先づ權實二教に就て心得て置かねばならぬ、權教といふのは人々の性欲が不同であるから、それに對應して種々の教法が説き出されて居るのをいふ。だから同一の言葉であつても内容義理が違つて居ることになる、譬へば水は物を清めると謂つても、井水もあれば池の水もあり、河の水もあれば海の水もある、處が水質は夫れ／＼特質を具へてゐることが知られ、随つて海の水と河の水と池の水や井戸水皆違ふ様に、釋尊の御説法は、文辭一の場合でも意義各異つてゐることを知るべきである。ぢやと申して佛教は解り難いといふのは不勉強の爲めである。『學問は天に昇るよりも難し』といふ様に、聖人の御精神の籠つた教法を新聞や雑誌を見る氣で安樂椅子に半臥し

て讀んだのでは理解されないのは當然である。それでも未だ手にしたといふならば幾分恕すべきだが、至然佛典に觸れないで、佛教の批判をするに到つては盲人蛇におちずの類であるまいか、苟も思想を論じ、宗教を語らうとする者にあつて、佛典を讀まないといふに到つては無論も甚しいものである。曾和君は法華宗に於ては釋尊を本尊とするといった様子で天台宗の五重玄のことと述べられ、若干法華經に親しまれた様にも思へるが、併し眞面目に法華經を研鑽されて居たとすると曾和君の如きお説は立たぬ筈である。生かちりは最も危険である、眞剣に御精讀を願ふ。

日本と法華經とは不離の關係であり、此の教こそ絕對的のものであり、釋尊の大精神であるのである。それ丈け法華經と申すお經文は幽玄な教理を藏してゐるから、誤解したり高きに祭り上げてしまふのである。併し僧侶に於ては天台宗は無論のことであるが、真言宗の弘法大師でも「今此の法華經は法王の明珠・大士の安車な

り、諸乘の異轍を泯し、諸川の異味を混じ、芳雲の著を破して、斯の平等の慧に歸す」と云ひ、念佛宗の法然上人は「ことに法華經は三世の諸佛もこの經によりて佛になり、十方の如來もこの經によりて正覺をなり給ふ」と述べ、曹洞宗の道元禪師は「法華經は諸佛如來一大事因縁なり、大師なり、餘經餘法はみなこれ法華經の臣民なり、大師なり、餘經餘法はみなこれ法華經の臣民なり、餘經中所說みな方便を帶せり、佛の本意にあらず。餘經中の說をきたして法華經に比較したてまつらん、これ逆なるべし。法華の功德力をかうぶらざれば餘經あるべからず。餘經みな法華に歸投したてまつらんことをまつなり。この法華經のなかにいまの説まします。するべし三寶の功德まさに最尊なり、最上なりといふことを」と。臨濟の白隱禪師の如きも法華首題の功德を讚歎して「今日より思ひ立ちて、憂きにつけづらきにつけ、悲しきにつけ、嬉しきにつけ、寝ても覺めても、起つても居ても

御贊ある所以である。曾谷君の申された此教こそ、我國に當て嵌る唯一無二の教法である。日本國と法華經は二而不二である、念思々々。

單に愛國と云ふことにのみ執はれて、教法の重んずべきことを知らない國民は暗黙にして却て國家を滅するものである。國家に於てはどうしても其國民を指導し啓發する所の教法が最も大切である、水戸の會澤正志の新論に於ても、日本は祖宗國を建つる先づ大經を樹つと書かれてゐる、即ち神勅を初めとして歴代の皇祖皇帝の遺訓は總て道徳的名教と拜する、隨つて日本精神の一番大切な所は、順逆の事理、正邪の途を明にして教の大切なことを忘れないやうにして行くことである、かの神武大帝の養正建國の御詔勅を拜すべしだ。この正義觀から尚式、強兵といふ第二が現はれて來るのである。

日本が國家の明教として奉戴して行くには、唯神ながらの教と儒教だけでは足らないのである、何故かと申せば哲學的の思想の根據に於て、宗教的の國民の情操を養

しはれ怠じて萬善を取りて合して一因と爲るの豈田」の  
皇道に融合してゐる。それだから千四百年前、佛教渡來後間もなく聖德太子に依つて憲法第一條の萬物三寶となり、法華經義疏の述作となり「夫れ妙法蓮華經とは、蓋し是れ怠じて萬善を取りて合して一因と爲るの豈田」の

ふ所に於て、又倫理の根據を哲學的に價値付ける所に於て、佛教を除外したり、輕視して我が國家の教として行かうとしても結局は失敗に終るであらう。現に今の思想界を見れば明瞭ではないか。だから日本人として日本の宗教といへば、皇祖皇宗の遺訓と、聖賢の道と、釋尊の教と合せたこの三教の心髓が、即ち我が國の教法と申す譯なんである。それを日本は神國だから神ながら一本調子で行かうとしたり、儒教などは守らないでもよいとか、佛教などは印度のものだから信じないといふ者は、皆思想の不具者といはるべきで思想や哲理や宗教の事を談論する資格はないと思ふ。天業恢弘天下光宅とは即ち日本とは世界なりといふことになるのである。心して戴きたいと思ふ。

次に大島寅吉君は宗教と教育の關係に就て如何に調和をはかるべきかを懸念されて居る、洵に有難い事である。然るに釋尊の教法は偉大なものであつて、之に依つて悔する。どうか今後は小學校の幼い兒童からこの法華經の信仰を與へるやうにしてほしい、これが忠であり孝である」と。宗教のない教育は、知識ある惡魔を作るのだと、ある人はいつてゐるが、蓋し思ひ半を過ぐるものがある。

赤松克磨君の質疑内容は簡単である。其の一は、宗教界に於ける相刻摩擦の發生に對して憂慮され、第二は、信教の自由主義を排して統制主義に行くこと、第三は、大陸政策と宗教政策との關係で、宗教家に對する十分なる啓發を要求されて居る。

現代の宗教家は、精神的の糧を民衆に與ふべきことを忘れて、自分達は生活第一義に没頭するからそこに諍は起り相刻する、皆道念のない證據なんである。僧侶の非行はいくらもあるが、而かも俗人も寢ぼけた者が多いから、お葬式には大きなお寺を望んだり、金襴の衣を好みで、その人格等は擇ばない、世間の見榮坊に氣をもんで

て人々が精神生活に入り、法悅歡喜の生活を營み、その信仰の喜の中から道義的感情が養はれて、喜んで善を行ひ德を積む人となることが出来るのであつて、これはどの宗教にも共通して居る所である。宗教が人々の心を軟らげ、人々の精神生活を教へ、そこから道義感情を導き多くの人を善くした力は洵に偉大なものであつた。故に聖德太子も『人尤も惡なるは鮮し、能く教ふれば之に從ふ、三寶に歸せざれば何を以てか枉れるを直ふせん』と遊ばされて居る。

今や日滿支の提携が叫ばれてゐる。それには小さい子供から正しい宗教を與へて一視平等に、しかもその中に動かすことの出来ない中心を確立して、これに宗廟せしむる教育が特に必要と思ふ。宗教と教育が敵視したり、教育が人を機械化したり、偏狭ではなるまい。故大迫大將はお遇ひする毎に申して居られた忘ることの出来ない一言は『先頃から佛教、特に法華經の値うちが理解出来た、こうなつては昔自分達が卒先して排佛をやつたが誠

をる銃子だから、坊さんは早く位が上がるとか、大きな寺に入らうとかに一生懸命で、布教どころのことではない。覺醒せる在家では、誇法の者には布施をせないことが最もよい、經濟封鎖をすれば坊さんは忽ち閉口頓首するものなんである。須らく出家も在家も共に反省すべきであると思ふ。

それから正しき宗教が、さう澤山にある譯はないのである。此際先づ國內の宗派を研討して統一をはかることが急務と思ふ。但しそれには各方面からの公論に決すべきで、正々堂々とやつてほしい。これが實現して始めて宗教政策も効果を奏することになる。宜しく眞剣にこの點は熟慮を望んで止まぬ次第である。本法案の中心をここに置いて、財的のことは第二義に顧ひたいものである。

次に杉山元治郎君並に椎尾辨匡君は數個の質疑を發して居られるが、その中にも新興宗教に對する政府の方針

如何といふことがある。然るに宗教といふものが眞に理解されるならば、今更新興の要もなし、又そんな危険性のあるものは宜しく統一し開顯されて行くべきものなんである。

又宗教教師の資格に就て國家がその指導標準になるべき教育を施す所を設けて然るべきものであるとのことだが、これも現在の様な無統制な分裂せる宗教界に對しては、益々混亂に導くやうなもので、勿論これは必要な教育機關であるから設置を望むが、その前に先づ教派の統一を圖り、更に神社と寺院の關係も明かにして置くことである。曾和君の『今日宗教ト我國ニ於テ言ハレテ居ル所ノ團體ハ宗教團體デハナイ、我國ニ取ツテハ是ハ信教團體デアル』といふ如き説は、一種の偏見である

そんな穿鑿の辯を振はれんでも、君の説の通り『我國ノ宗教ト申シマスルモノハ、我方國體ト離ルベカラザルモノデアル』然り、有ゆる數學の根本をなすもの、大宗を成するものが既にある。いくら近くにあつても盲人は太陽を見す、聾者は雷の音を聞かぬであらう。お互は充分

に戒心して學ぶべきであると思ふ。明治大帝五箇條の御誓文に於て、

舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ。

知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ。

朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ 天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス、衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ。

と、明治元年の春、お示下さつた 大御心を有難く信奉して行くべきである。排他固陋になつて獨善慢心しては、破滅の因をなすであらう。今世界を導かうとする聖業の火蓋は切られてゐる、唯に強兵ばかりで世界第一の國と騒いではなるまい。國家がその行動を誤らぬやうにするには、國家の従ふべき基準、國家の行動を是正さるべき教法こそ大切である。日蓮聖人が正しい教を立つる所に國は安かであるとの血の叫びは、千古不磨の真理である。敢て各位の三省を促がすこと切である。

(一一)

國に深淵な哲學なく、崇高な宗教が無かつたならばその國家の前途を知るべきのみ。顧くは本法案が付託されし各委員に依り、只その有形の上にばかり捉はれずして即ち寺院教會の財産も大事ではあらうが、それよりも一入立ち入つて宗教の統制から一飛躍して、その開顯統一を詔り僧侶教師の向上に昂め、以て國民精神指導の基準を定め、天下萬民和樂の實を擧ぐべく、此際思ひ切つた透徹せる法規出現を念じてやまぬ者である。

——三、一四、五箇條御誓文を拜して——

弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、

何ぞ佛法の衰微を見て心情の衰惜を起さざらんや。

一立正安國論一

以上

日蓮聖人御書講座  
日 時、毎週火曜日晚七時—八時半  
場 所、統 一 會 館  
御 書、撰 時 鈔  
講 師、小林一郎先生

聽講料、一ヶ月金壹圓也

財團 統 一 團

# 宗教生活と教義

守屋 貫教

前に私は、日蓮聖人の唱題の修行が發展して立正安國の實踐運動となり、その實踐運動は宗教的迫害を惹起し、聖人自ら流罪地に於て憂き生活を送ることとなり、その艱難流離の生活から聖人が輝かしい而も涙ぐましい生活を開展されたことを述べた。その宗教生活から何が生れたか、何を聖人は創造されたか、本號はその大切な事を語らんとするものである。

立正安國論故に聖人が伊豆へ島流にされた時、そして苦しい生活を送ること約八ヶ月、その間に四恩銭といふのを御書になり、その所謂輝かしい涙ぐましい生活を御發展になつてから間もなく、教機時國銭といふのを御撰述になつた。この教機時國銭といふのが、初めて聖人の教義の基礎を示されたものである。

聖人が佛教に於て演ぜられた重大な役目の一つは、釋尊の真佛教とは何ぞやといふ問題を解決することであつた。その事は幼少の時虚空藏菩薩の前に「日本第一の智者となし給へ」と祈願された事に依つても分る。爾來廿年に亘んとする苦修練行は全く東詣南詣只管釋尊の真佛教を求めて已まざるものであつた。そして廿年求めに求めたものを終に法華經に於て發見したのであつた。その三十二歳の時の宗旨建立は法華經が釋尊の真佛教なりとの宣言でもあつた。然しながら聖人の宗教は宣言のみではなかつた。その宣言を世間に行する事であつた。それ故に聖人はその一代を法華經の行者を以て任せられたのである。法華經の行者として世間に立つて茲に十年、而も法華經の實踐を立正安國へと發展し、その行を依據として聖人は初めて真佛教解決の基礎を發表されたのである。

眞佛教とは何ぞやとは、佛教では古來教判と呼ばれて居る。教判とは釋尊の教には大乗小乘權教實教顯教密教の種々相がある。この種々相を淺深の次第を經て宗教哲學的に判別すれば、何が眞實の教であるかといふ事は一應解決がつく。然しながらそれでは餘りに抽象的であり形上而學的である。佛教は單なる哲學ではない、宗教であり實際生活である。それ故法華經を行ぜられた聖人は、釋尊の思召に従つて教を單なる宗教哲學的考察でなしに、之を機と時と國と教法流布の前後との關聯に於て規定付けられたのである。

教は人間の機根即ち宗教心理に應すべく設けられたものである。人間を救ふべく立てられたものである。釋尊の弟子の舍利弗は、智慧第一と呼ばれたけれども、この人間の機根を察知することは出来なかつた。彼は鍛冶屋を教ふるに不淨觀を以てし、洗濯屋を教ふるに數息觀を以てした。不淨觀とは人間の肉體が不淨であることを観じて欲望から解脱するといふ修養法である。之は鍛冶屋に適せずして寧ろ洗濯屋に適する修養法である。また數息觀とは息を數へて心を靜める修養法である。これは洗濯屋に適せずして寧ろ鍛冶屋に適する修養法である。それを舍利弗は察知することが出来なかつたら、兩者共教化することが出来なかつた。然るに佛は鍛冶屋には數息觀を教へ、洗濯屋には不淨觀を教へたものであるから、ビツタリと教化することが出来たのである。智慧第一といはるゝ舍利弗すら尙機根を知ることは難い、唯佛のみは人間の機根を知るしめして居る。人間のこの機根にビツタリと適した教が即ち法華經の教であると聖人は先づ定められたのである。

次に佛教は時代に適應するものでなければならぬ。春になると花が咲き秋になると果實がなるやうに、また夏は暖かく冬は冷たいやうにその時節に適するのでなければならない。佛の教はその在世ばかりでなく、滅後までも心配して立てられたものである。而も滅後に就ては教の適不適に就いて豫言までされて居る。正像末の三時といふのがそれである。正法是一千年、その時代は佛の正法が尚ほ存して居る時代、像法は次の二千年、その時代は正法が漸くすたれて佛の教に似た教が行はれる時代、この時代の時代、法華經は次の二千年、その時代は正法が漸くすたれて佛の教に似た教が行はれる時代、この時代の教であると立てるのである。

は堂塔伽藍が、盛に建設されたり、御經が數多く讀誦された時代、その次の時代以後即ち佛滅後二千年以後は佛の教が實質に於ては全く失はれて諍論のみ盛なる時代、之を末法時代といふ。斯る時代には尋常一樣の教は世を救ふことが出来ない、法華經のみ世間の闇を照らす教であると立てるのである。

次に教は國家に適合したものでなければならぬ。國家には昔でも今でも様々の國家がある。その歴史も異なりその國民性も異なりその成立も異なつて居る。教は唯人間の機根に適するといふばかりでなく、機根の集團である國民に適切なものでなければならぬ。國家には昔でも今でも様々の國家がある。國に依つて之を弘むべし」とせられるのである。國家は單なる民族の結合でない、道の上に法の上にこそ國家は建立さるべきであると觀るのが、聖人の國家觀の根柢である。それで聖人は道の上に立てられたこの日本國、歷代の聖天子道を體現されたこの日本國こそ、而もその國體に悖る當時の日本國を叱咤してこの國こそ法華經と相一致する國家である、法華經こそ日本國を教ひ、日本國こそ法華經の弘まるべき國であると道破されたのである。

最後に佛の滅後教法流布には自ら前後次第がある。小乘の後には、大乗が流布され、權經の後には實經が流布される。印度支那日本三國に當つて佛法流傳の歴史を察知すれば、教の動く處が自ら窺はれるわけである。聖人は佛教發展史に對するその取捨に於て、深く佛意に順ひ、そしていうて居られる。『瓦砾を捨てゝ金珠を取るべし、金珠を捨てゝ瓦砾を取ること勿れ』と、それで佛の已に說かれ今現に說

かれ、當に未來に説かるべき教の中第一である法華經を眞實の教と立てられたのである。

## 三

教義に對する五つの規定即ち五個の教判の上に聖人の三大秘法は打建てられたのである。それが即ち南無妙法蓮華經の教である。その南無妙法蓮華經の教が、聖人の如何なる宗教生活から創造されたか、それは次回に説くとして、私は聖人の一代を通して動いた五個の教判に就て尙一應語つて見ようと思ふ。

前にもいうた如く、聖人の法華經中心の佛教は既に比叡山に於ての修行中に決定したのであるが、更に開宗以後の法華經生活に於て、世界と共にその法華經の教を行じて、茲に教義に對する五つの規定即ち五個の教判を確立されたのである。然るに聖人の法華經の行者としての資格には二段の發展階段がある。その第一段は専らこの日本國に法華經を行ぜられた時代である。『日蓮は日本第一の法華經の行者なり』とは、文永元年十一月十一日の夕暮東條左衛門尉景信の一黨から小松原で襲撃された時發表された文字である。この覺悟で聖人は不惜身命の傳道をされて、終に佐渡への流罪となり、その流罪地で開目鈔を撰述して本化上行の自覺を發表し、更に觀心本尊鈔を撰述して一期の本懐を發表してその境地から大曼茶羅を圖顯された。教に對する五つの規定は一具したものであるが、また一具したものとして各別に取扱れて居る。守護國家論とか立正安國論とかいふものは、教と國との雙關を取扱れたものであつて取扱れて居る。

り、開目鈔、觀心本尊鈔などは主として教を取扱はれたものであり、機に就ては特に取扱はれたものはないが、聖人の説教聖人の實踐が衆生の機根に適應した事は申すまでもない。

然るに聖人の法華經の行者としての資格は、その身延九ヶ年の生活を開展するに當つて一段の高揚を來して居る。是れ即ち第二段の發展である。身延生活は單なる隱遁生活ではない、寧ろ教を永遠に傳へんとする生活である。勿論それに相應する法華經的生活を聖人は營めたのであるが、聖人はその生活の中に撰時鈔といふのを撰述せられ、自らを一閻浮提第一の法華經の行者とも、一閻浮提第一の聖人とも呼んで居られる、その名は聖人の教が世界に光被すべき事を示すものでなくて何であらう。それでこの撰時鈔を撰述された時、聖人は前に鑑み將來を挾じてその教の正しく時に相應することを、しみと感ぜられたであらう。特に教と時との雙關に就て精しく語つて居られる。その翌年舊師道善房の死を弔して報恩鈔を撰述された時は、教と序即教の流布の前後に就いて精しく語つて居られる。これは舊師の恩を感じて遠く佛恩を報謝し、その將來を達觀して教の總括的統合を示されたものであらう。

# 鈴木日雄上人

本多上人と師範を同じうせられてゐた鈴木上人、永らく統一誌の奥附にお名前を見えた鈴木上人、顯本法華宗加歎第二百七十一代の鈴木上人、温厚篤學にして護法の鈴木上人、謙讓寡言にして能筆の鈴木上人、自分とは同郷の親み深い鈴木上人は、客職兒玉師匠の五十年忌を津山に營まる際、遙々老軀を運ばれ、且つ山陰鳥取地方にまで巡錫を請はるゝまゝに伸ばされたが、御歸坊後感冒が因で遂に小林日至上人の祥月御命日と同じ一月廿六日、火の盡きて煙の消ゆるが如く尊い最後の教を垂れて化を他土に遷されてしまつた。凡情としては堪え難い嘆きである。惜しみ切れない悲しい不幸である。護法の上からも大きな打撃である、曩には能仁上人を喪ひ、今又この悲みに會はんとは……

日雄上人は、本多上人滅後に於ても本國の爲め陰に陽に超然としてお力添へ下さつた。日生上人の華かな御活躍の背後には常に鈴木上人の黙々として世間に知られてない精神的物質的の後援あつた事を一入有難く思ふのである。僧俗に限らず多くの者は、少分の善根でも相當大袈裟に誇張するものだが、鈴木上人は御家族の方にも知らせない徳行が數多くあるらしい、あまり斯様なことを書き記すこともお厭びにはなるまい、矢張り静かに御寶前に御題目を唱ふるに之かずと禿筆を擱いて誰んで 増圓妙道報恩謝徳の御回向を捧げ奉る。

## 南無妙法蓮華經

昭和十四年三月一日第五七日忌に臨みて、自他彼此の心なく異體同心に正法擁護廣宣流布を念願しつゝ

## 磯部満事

合掌

**山田理事令夫人を悼む**

出る氣は入る息を待たずとは誰しもいふ所であり今更驚くべきことではないとは云ふものゝ、これは理法である。日蓮聖人も「無常はつねの習なれども此事うち聞く人すら猶忍びがたし、況んや親となり妻となる人をや、心の中おしはかられて候」とも「夢か現かわきまへ難く覚え候」とも仰せられてゐる。彌々自分共の身邊に迫つて來た時、そこにいひ盡し難い悲痛の嘆を懐くのが人情であらう。そこで平素から妙法の良薬を糧として不滅の常樂我淨の佛身を成ぜしむることが大切なんである。

本園理事山田英二氏は、一昨年末三十一歳の御長男を喪はれた悲哀の泪のまだ乾かぬ今春三月一日、一家打揃つて夫人の調理に舌鼓をうち、而も箸を下にくか置かぬ間髪に、文子夫人は異變の狀をお示しになつた。始めは誰れも大して氣にも染めず、何だか少し變だナといふ程度で、併しどうの様子がおかしいと静かに介抱される。夫人も「お醫者さんはいませんよ」と小さい聲で申されたとか。それ程であつたのに、ア、それだのにその翌日二日のお晝過には遂に境を異にされやうとは、何とお悼ましい情けない事ではないでしやうか。逝く身はそれこそ何等の苦悶もなく寔に易々薨散とし

て靈山往詣されたであらうが、遺族にとつては一段と名残りが惜しまれてならぬ、嗚呼何と申上げて宜しいやら……  
お通夜の時、小林一郎先生は、御感想を述べられて死の教訓に二つの大きな意義があると思ふと、その一つは自分の命は何日何時だかは凡夫の豫知されない事である、故に今のいきのある間に最善をつくして功德の種を植えておかねばならぬ、善因善果惡因惡果の因果の理法は歟として千古不磨の教だから、私共は日常必ず自己反省を要すべきことゝ、も一つはあとに遺された者としては、逝ける人の分も、これからはお互に分擔して二人分の精進を致すべく大に發憲せねばならない。これが死者に對する一番の回向であり供養でしやうと。  
山田理事が、本部の集會には十年一日の如く何事をさしおいても、常精進菩薩としてお力添をして下さつて居たことも、畢竟内にこの賢夫人のあればこそと、その大善根を深く追憶して一入哀惜の涙を禁じ得ないものである。謹みてその御冥福をお祈り申上げる。

慄る精神的にも亦物質的にも甚大な打撃をうけられたのにも拘らず、山田理事の護法道念は益々熾烈で、今回金壇百圓也を本園に御供養下さつた。爰に重ねて

靈峰院妙文日映大姉  
佛果増進を御寶前にお祈り合掌し奉る。

南無妙法蓮華經

## 記事

## 本部團報

本多上人報恩會 三月十六日は、日生上人第九周年忌祥當である。本部に於ては各位の便宜上十二日の日曜日午後一時より會館の御賓前莊嚴の御前に、御遺族始め御親戚の方々御参列の上、懇ろな御回向を捧げた。そこにはつきざる深いものが流れてゐることを強く感ぜしめるのである。

法要後有志の感想談を語り合つたかつたけれ共、品川へお墓参りの時間の關係上、直ちに出發に決し、磯部理事より時局柄自動車は節約して飯田橋迄徒步、それから省線と京濱電車を利用したらばと思ひます、それで途中を意義あらむべく日蓮宗のお題目と太鼓は大に職がされてゐるから、私共はこれを一番清淨なものにして、お祖師様に御覽に入れたいものと存じ、有志は大に法鼓を擊ちつゝ行進致します、御贊同願ひますと。數個の太鼓組を先頭に、一同唱題しつゝ武歩堂と進軍した。

道中の老幼男女は何事かと忽ち戸外に飛び出して、今迄に聽き馴れぬ撃ち方に目を瞠り、耳を歎てつ群をなして迎へた。服装といひ、態度といひ、これは只事ではないと會ふ人

人は感じたらしく、中には合掌するもあり、帽を脱いで敬禮して過ぐるもあり、口に和唱するもあつて、沿線數十百千の人等に雨強毒之の便ともなつたであらう。法鼓の威力は強大である。

品川妙國寺の御賓前に於て懐かしい思ひ出の御回向を營み、それより清掃された瑩域に三度赤誠を懃げた。ある人は自坊で御回向して居るから、態々展墓の要をみないといふが、これは甚しい間違ひである。法華經に説かれてゐる色心因果の理法は、情非情の上に及ぶ百界千如一念三千である。お墓を弄情として、自分共は實在意識の信仰に立つてゐるから偶像の崇拜は迷信だといふならば、木畫の像を御本尊と侍み奉ることはないとと思ふ。お墓を粗末にする様な人に終を全ふする者はない、祖先を輕んじて我身あるものではない、教神崇祖は日本人の偉大な傳統精神であり、強味であり、大乗の民である。

お墓まわりの済んでから、一同は客座敷に通つて打ち窓いだ。お茶を啜りながら藤の古木や池を眺めて、窓下の御在世を偲んだ。五月六月に紫色の藤の花がズラリと垂れ下つて見事な頃『花見でもしませうか』とお子様等を對手に静かに琴を聽かれた事もあつた、机に筆を執られた事もあつた、庭に下りて池の邊を歩かれた事もあつた。今日は淋しい、モーそれはない、今は淋しい。

五時頃名残り惜しく散會して各自の歸路に向はれた。品川の空に太鼓の音を残つゝ。

先師の追憶 二月廿六日は権大僧正鈴木日雄上人の御立日に相當するとのと、小西日喜上人の第一周忌を俱に本團で相營み、追憶報恩謝徳の法味を捧げたいものと、午後二時から和賀山口師等を中心に各御遺族を始め有志多數參列御回向申上げた。本門法華の三吉上人からは「月日の立つは早いものにて、感慨新たなるもの有之候、其の日御座に是非參列いたし法雨に浴し度候も當日は生憎池上に同刻講義有之殘念ながら訣席遙拜させて頂くべく候」又本妙法華の釋上人からは「是非參拜可申上の處日曜にて豫て約束の法要有之候爲め失禮訣席仕候云々と鄭重な御挨拶状に接し一入懷舊の情を深めた。

法要後磯部氏が司會者となつて、山口師の追憶談に續いて鈴木秀學師から父上であり師匠であらせらるゝ日雄上人と本多上人の往復文書等に就て思出深いお話を承つた。終りに和賀師の御挨拶で閉會は五時頃であつた。

小西師一周忌、鈴木上人立日を迎て

本郷日常

八木沼丈夫氏を迎えて 今回北支宣撫員採用の爲め、容易に離るゝことの出来ない任地から手廻しよく幾多の重要な件を善

處し、三月九日入京された。この言辭に絶した多忙の總班長

が、同信なればこそそいそ／＼として我が同心會、月三回の例會中の十一日に臨席され、一同と胸襟を開いて宣撫の情況や

## 統一團同心會報

樹王院妙光院とつぎつぎに

みかる人のなどてたへざる。

弔ひし人のとぶらひひとまわり

たつやたゞねにあはれ迎ふる。

日曜清集 寒修行後も毎日曜の未明から、十數名の篤信諸彦は沸曉の勤行にいそしまれてゐる。而して済んでから汗でビツショリの背中を拭つて貰つたり、懇談や俳句に睦み合つてゐる。二月二十六日は夜來強風であつたから、

風すさむ春の曉太鼓の音 月 歩

三月に入りて

なり響く太鼓の音や春かすみ

かほる

北支より八木沼宣撫總班長の入京を迎えて

かほる

八木沼にかかる鐘の激刺と

かほる

山櫻北支にかかる丈夫かな

美津留

北支にもかほりたなびく山櫻

月 歩

御書講座 小林一郎先生の立正安國論御講義は、去る三月七日第十七回を以て終了。十四日の火曜晚からは撰時鈔をお願ひし、時節柄大に勇躍法悦に浴してゐる、御來聽をお薦めする。

ら苦衷をある程度語られ、根本的には信仰の重要性を繰々數千言、其の尊い献身的菩薩淨行、北支無辜の良民の爲め全く文字通り寢食を忘れての大精進、かゝる如來使を果してどれだけ世間で感謝してゐるであらうか。勿論八木沼總班長は何等名利の念は毫末もない、又そんなものがあつたり、身命を惜んではこの宣撫の仕事はやれないであらう。命も要らぬ、金も要らぬ、名もいらぬ、一切求めざる能捨の心、而も身を持する堅城、忍辱の鏡を要し、靜かなる禪定三昧と、獅子王の勇精、正邪善惡の思慮分別を以て、所謂日蓮魂の権化こそ宣撫員として要望さるゝと思ふ。

今の時、内には各々自界叛逆の兆あつて互に黨に據り、外には他國侵逼あつて國際間の微妙な動きを示し、爰に自界と他國と入り亂るゝ階級闘争、主義評論、人種争ひの絶ゆる間もない全く白法隱没、圓諍堅固の佛讖は寸毫も相違してゐない世相を現出してゐるでないか、果して然らば今こそ妙法蓮華經の廣宣流布も疑ひあるまい、即ち一天四海皆歸妙法の事相も間違ないと確信する。他を待つ迄もない。見よこの同心會を！ 各位夫れ大に發憤興起されんことを藉つてやまぬ次第である。

**種村五郎氏入京** 八木沼總班長に續いて種村班長は、三月十五日早朝着京、直ちに統一團本部御賓前に報告祭を營み、終るや即刻階行社に八木沼總班長を訪ひ、諸種の打合せ等あつて中一日置き十七日晚、本會にて歡迎茶話會を開催した。義

己レヲ忘レテ他ヲ利スルハ慈悲ノ極ミナリ。  
四六時中、佛陀の如き心意氣で精進されて居るが故に、自から夫が外に現はるゝのであらう、有難い事である「心甲斐なければ多くの能無用なり」と、日蓮聖人は仰せられた、幸にも吾等は二人の此同志に直面して、益々道念を策勵し以て四恩報答の誠を竭したいものである。

た。

後茶菓を頂き座談會に入り、法悅に満され十時散會した。

**團費誌料維持費及寄附金領收**

(自二月二十一日至三月二十一日)

**福島支部報**  
三月八日 午後七時御多忙なる磯部先生を迎へ、大町中村様方にて例會を開く。お勤め嚴修の後御法話あり「説教の網」と題され、今度の宗教法案に對し代議士諸君の質問並びに文部大臣の答辯は、吾々から見て甚だ遺憾である。宗教を或は社會の通念と言ひ、或は夢と罵るに至つては暗渙三斗を禁じ得ない、されば日蓮聖人は説法を非常に諱められて、佛法の正しい考へ方・修業法を示された。先づ權實を辨へ、而して本述を知るべきを教へられ、常の修業には方便品と壽量品と題目とを修し、その中壽量品が中心であり題目が正行であると諭されてゐる。

我國は歷朝佛教を尊重されて、法國冥合の實をお示しになつてゐる。實に法と國とは離すことは出來ない、正しい信仰のない國は亡びる外はない、あゝ佛國土建設は刻下の急務でなくて何であらふ、諸子は身を以つて範を示すべきだと結ばれ

一千貳圓貳拾錢也	千葉縣	齋藤昭行殿
一千貳圓四拾錢也	大阪	清原淺治郎殿
一千貳圓四拾錢也	京都	金光日心殿
一千貳圓五拾錢也	横濱	稻葉いく殿
一金參四也	東京	村松菊野殿
一千壹圓貳拾錢也	千葉縣	並木博殿
一千壹圓參拾錢也	東京	本郷常次郎殿
一千貳圓四拾錢也	兵庫縣	笠倉鹿太郎殿
一千五圓也	千葉縣	山岡日紹殿
一千貳圓五拾錢也	山形縣	村川源次郎殿
一千拾圓也	東京	沼部彌太郎殿
一金拾圓也	同	何某殿
一金貳圓五拾錢也	大阪	夏谷泰司殿
一金拾圓也	夏谷泰司殿	

に福岡同志を迎えた時も、その相貌の一變せるに歎んだが、今種村同志に接しても等しく一年前送別の大姿と全然見違へる輝かしい此の風貌に面して嬉しさ胸一杯である。『相は心を逐ふて生ず』と骨相學ではいふが、實に感慨無量である。

連日連夜二三時間の睡眠で、屢々徹夜もある、食事も缺食したり不規則膳の苦難の日常が五體を損することなしに、却つて人格が莊嚴されて来るといふことは、生理上了解され難い處であるまいか、十二分のエネルギーが消耗されて、三分か四分の補給よりされないのに却つて肥満し血色もよくなるといふ事實は何を物語つてゐるでしやう。種村、福岡等の同志が、側からは平いと考へる命懸けの身心共に苦しい、そして今迄に少しも経験のない初めての宣撫淨業に當面しつゝ、一言も不平不満のないのみならず、どうしてなか／＼有難い事です、愉快で堪らぬといつて居られるが、それは實に儀らざる告白と思ふ。邪念あれば宣撫の仕事は一月と半棒は出来まい。

弘仁の音、傳教大師が、嵯峨天皇様に上つた學生式の勞頭に、

國寶トハ何モノゾ、寶トハ道心ナリ、道心アル人ヲ名ケ  
テ國寶トナス……道心アル佛子ヲ西ニハ菩薩ト稱シ、東  
ニハ君子ト號ス、惡事ハ己レニ向ヘ、好事ハ他ニ與フ、





## 次 目

聖訓摘要	聖
開目鈔講話（第二十八講）	開
本尊曼陀羅の意義（三）	目
徳川光圀卿の信仰	鈔
詩集	講
御鳥羽天皇七百年祭を迎へて	話
記事	（第二十八講）
日蓮聖人を憶ふ	小
○本部團報	本
○昭和十三年度決算報告	本
○小松川立正會報	河
○福島支部報	井
○團費誌料寄附金及維持費領收	八
	木
	上合林多
	木沼丈
	日陡一日
	常次郎
	夫豊明郎生

第44年5月號

14/5/27